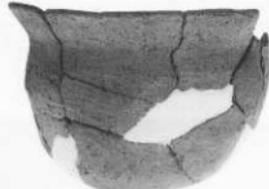
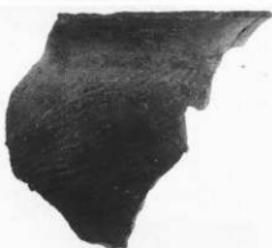




266



267



269



272



271



274



273



268



265



270

S K 509(265)、S D 556(266～274)出土遺物



276



277



278



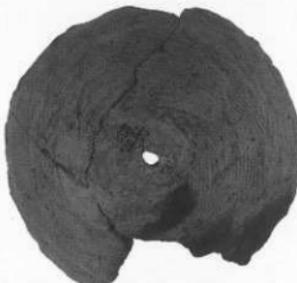
279



280



281



283

282



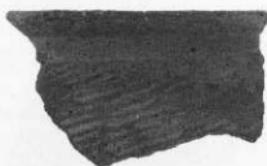
285



286



287



288



289



291



290



292



293

S D578(285)、S D581(286・287)、S D582(288～290)、S D583(291～293)出土遺物



297



298



299



300



301



302



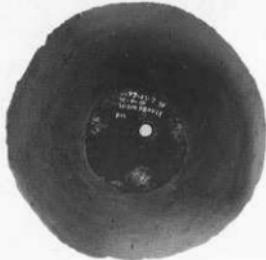
303



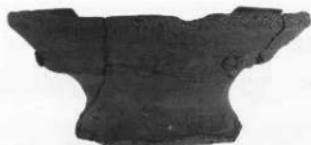
304



296



S D 583(294・296～298)、S D 590(299)、S D 596(300～303)出土遺物



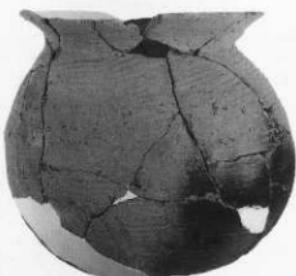
305



313



307



306



320



309



304



S D596(304)、S D5102(305~307)、S D5103(309・313)、S O501(320)出土遺物



322



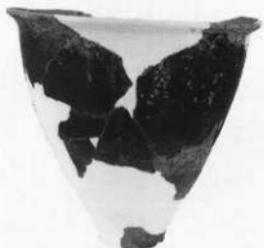
323



325



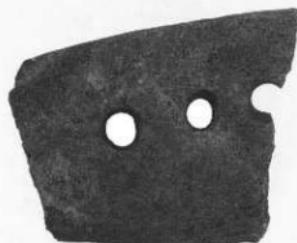
327



329



330



336

N R 502(322・323・325)、N R 601(327)、S K 702(329・330)、S D 712(336)出土遺物



340



344



345



346



347



342

第三層(340・342)、第四層(344~347)出土遺物



348



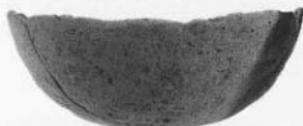
349



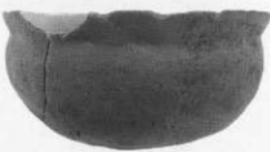
350



351



352



353



354



358



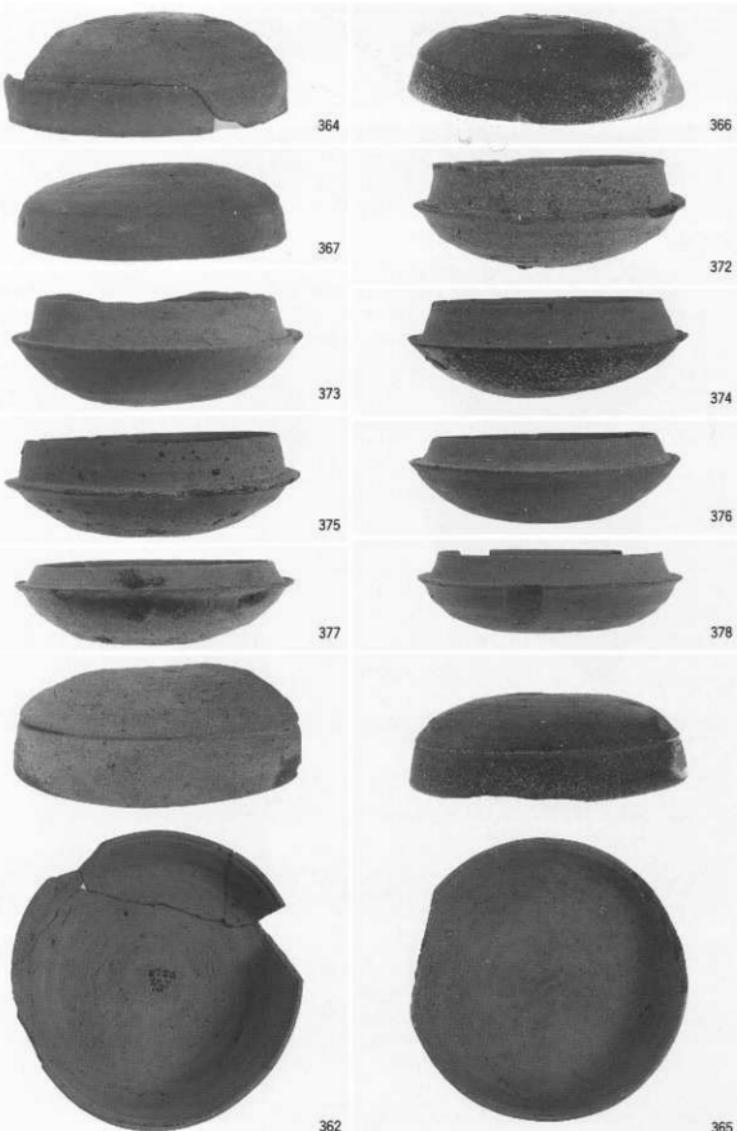
361



359



363



第VI層(362・364~367・372~378)出土遺物



382



383



384



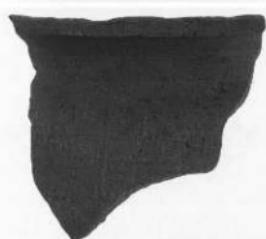
385



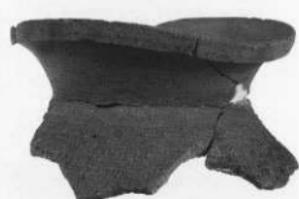
386



387



388



389



390



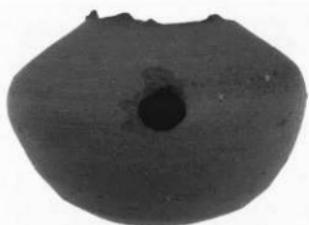
391



392



393



397



398



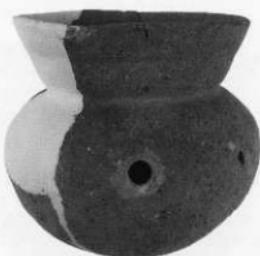
401



402



399



400



403



404

第VI層(397)、第VII層(398~404)出土遺物



408



409



405



410



411



406



414

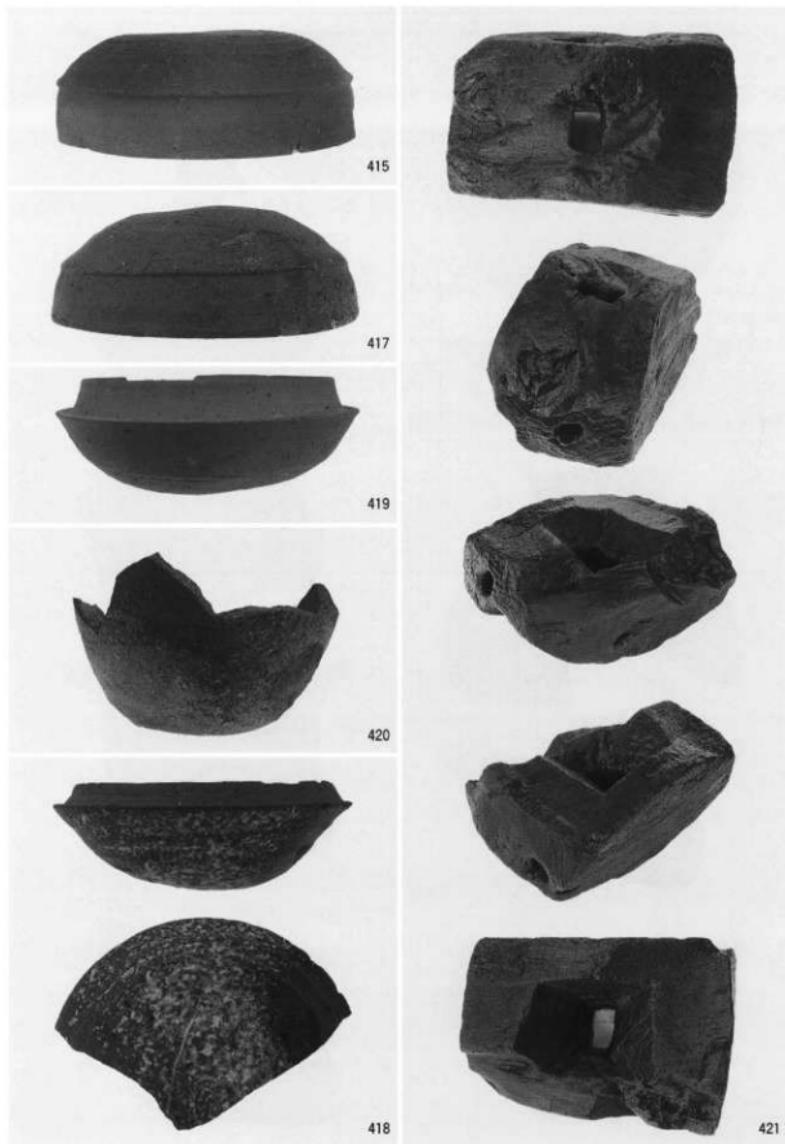


407

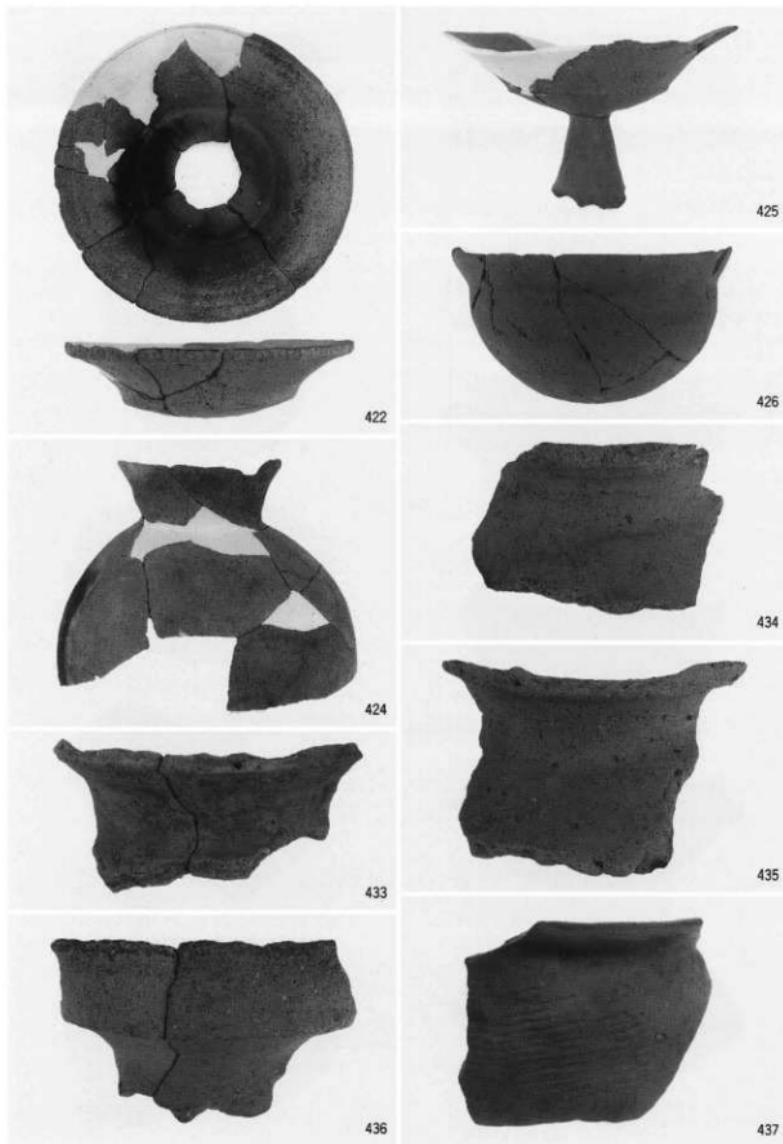


412

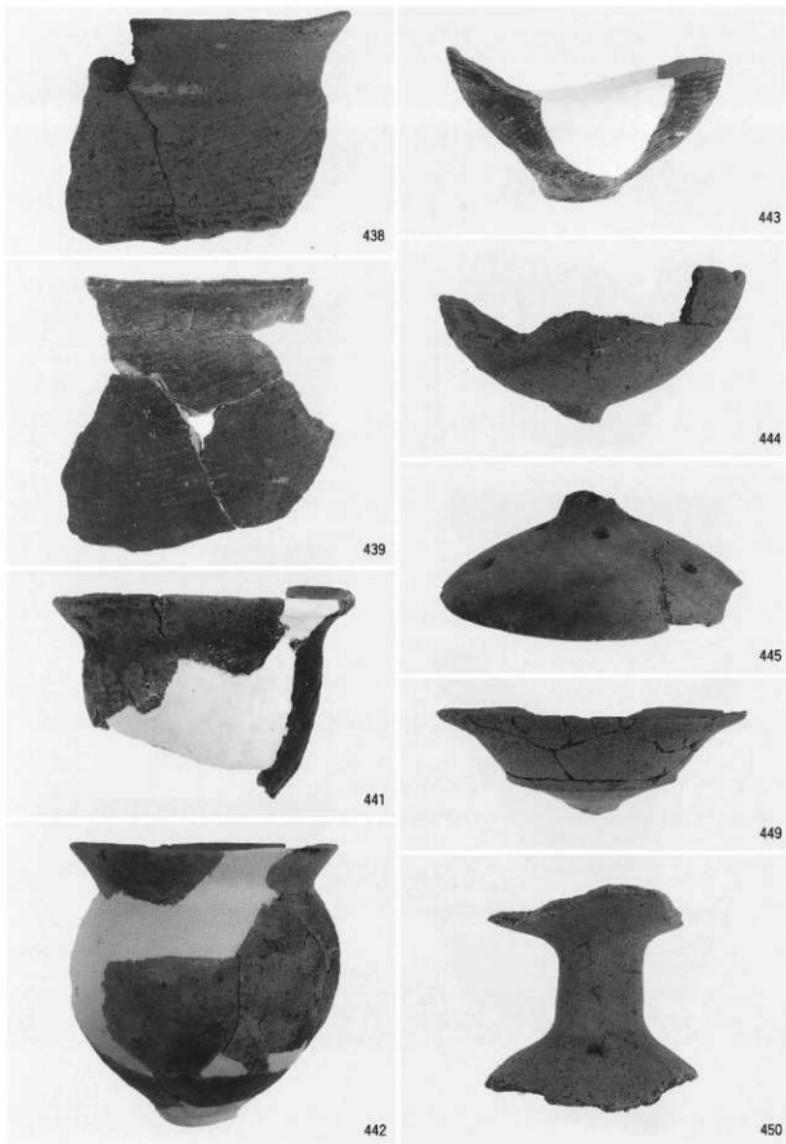
第V層(405~412・414)出土遺物



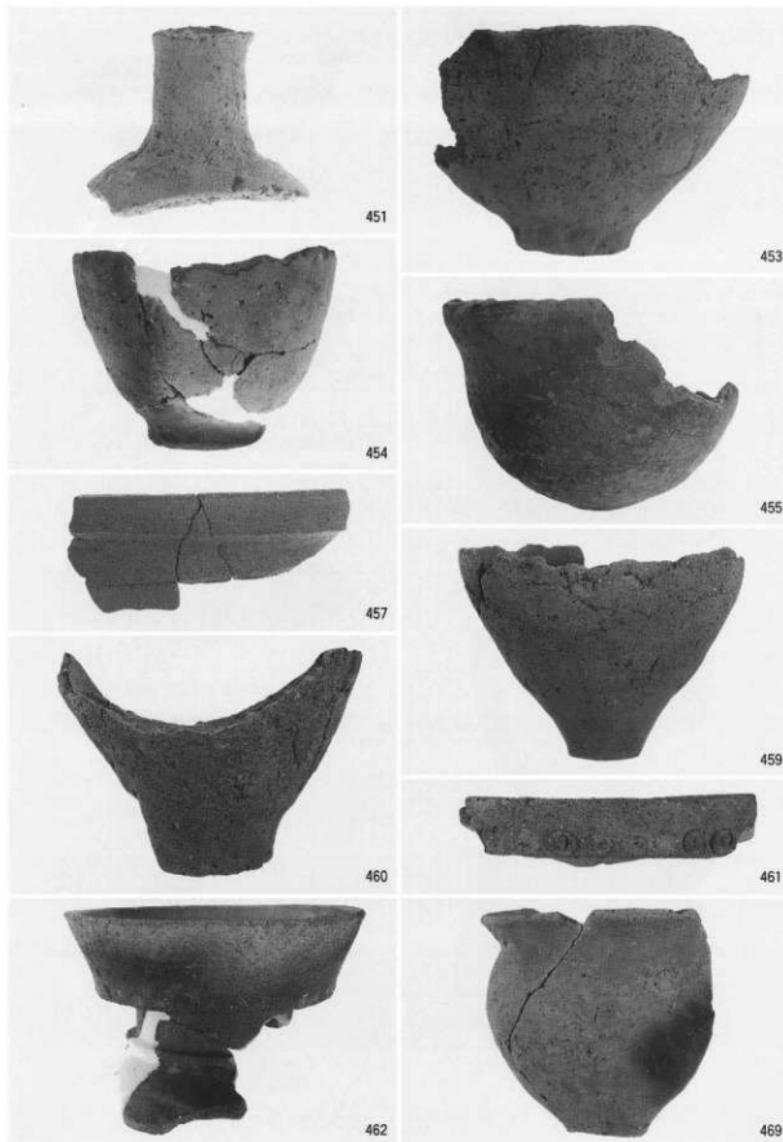
第V層(415・417~421)出土遺物



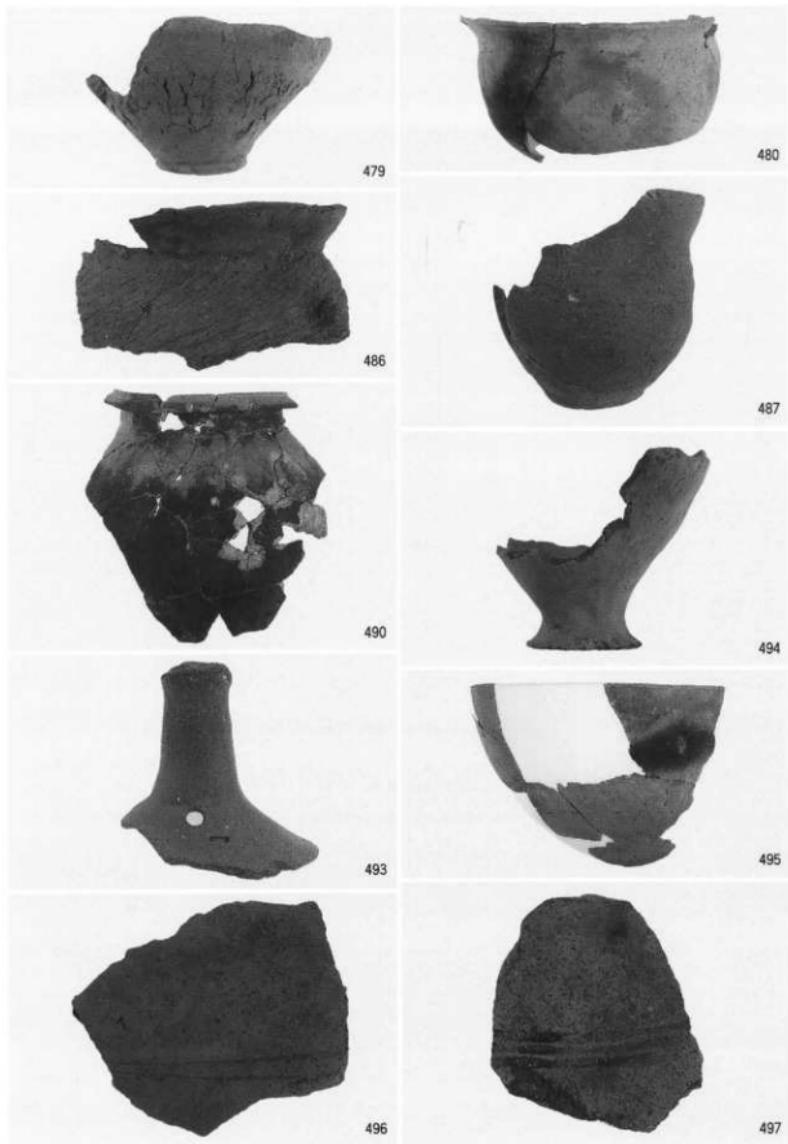
第 XI 層(422・424~426)、第 XII 層(433~437)出土遺物



第三層(438・439・441~445・449・450)出土遺物



第五回(51・453~455・457・459・460)、第五回(461・462・469)出土遺物



第Ⅲ層(479・480)、第Ⅳ層(486・487・490・493~495)、第Ⅴ層(496・497)出土遺物

II 久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字渋川および大字亀井(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では龍華町1丁目・2丁目に包括される)で、平成11年度に実施した八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(植松排水路他工事および久宝寺南駅前線3工区建設)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第30次調査1調査区・2調査区(KH99-30-1・KH99-30-2)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社(現、独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年1月20日～平成12年3月30日にかけて1調査区は西村公助、2調査区は原田昌則・岡田清一が担当した。調査面積は893.0m²である。
1. 現地調査においては、奥村 崇・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・藏崎潤子・後藤 喬・小林範彰・曹 龍・田島宣子・永井律子・中村百合・村田知子・若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成16年5月11日～平成17年3月28日に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－岩沢玲子・伊藤静江・加藤・北原清子・竹田貴子・永井・中村・村田・吉川一栄・若林・遺構図面レイアウト・遺構図面トレース－荒川和哉、遺物図面トレース－山内千恵子・遺物図面レイアウト－坪田真一・遺物写真－荒川・垣内が行った。
1. 本書の執筆は、調査終了報告書および調査担当者の見解に基づき、主に荒川が行ったが、出土遺物については原田が行った。
1. 土器の形式・編年で参考とした文献については307頁に提示した。

本　文　目　次

第1章 はじめに	277
第2章 調査概要	279
第1節 調査の方法と経過	279
第2節 1調査区	281
1) 基本層序	281
2) 検出遺構と出土遺物	281
第3節 2調査区	285
1) 基本層序	285
2) 検出遺構と出土遺物	285
第3章 まとめ	306

挿図目次

第1図	調査地周辺図	278
第2図	1調査区 設定図および地区割図	279
第3図	2調査区 設定図および地区割図	280
第4図	1調査区 S K101出土遺物実測図	281
第5図	1調査区 S K101平断面図	282
第6図	1調査区 検出遺構平面図および西壁断面図	283-284
第7図	2調査区 第1面検出遺構平面図	286
第8図	2調査区 東壁および管路部分東壁断面図	287-288
第9図	2調査区 畦畔101断面図(西壁部分)	290
第10図	2調査区 畦畔101盛土内出土遺物実測図	291
第11図	2調査区 S E102平断面図	292
第12図	2調査区 S D105出土遺物実測図	293
第13図	2調査区 S K202出土遺物実測図	294
第14図	2調査区 第2面検出遺構平面図	295
第15図	2調査区 S K301平断面図	297
第16図	2調査区 第3面検出遺構平面図	298
第17図	2調査区 S K301出土遺物実測図	299
第18図	2調査区 S K302平断面図	299
第19図	2調査区 S K302出土遺物実測図	299
第20図	2調査区 S K304平断面図	300
第21図	2調査区 S K304出土遺物実測図	300
第22図	2調査区 S K305平断面図	300
第23図	2調査区 S K305出土遺物実測図	301
第24図	2調査区 S K308平断面図	301
第25図	2調査区 S D301出土遺物実測図	303
第26図	2調査区 第3面溝出土遺物実測図	304
第27図	2調査区 第4層出土遺物実測図	305
第28図	2調査区 第5層出土遺物実測図	305

写真目次

写真1	2調査区 調査風景	277
写真2	2調査区 S D301土器集積検出状況	303

表 目 次

第1表	調査区一覧表	280
第2表	2調査区 第1面溝(S D)法量表	293
第3表	2調査区 第1面小穴(S P)法量表	293
第4表	2調査区 第3面溝(S D)法量表	302
第5表	2調査区 第3面小穴(S P)法量表	304

図 版 目 次

図版 一	1調査区から西方を望む	
	1調査区 西部検出状況	
	1調査区 西壁地層断面	
図版 二	1調査区 東部検出状況	
	1調査区 S K 101検出状況	
	1調査区 調査風景	
図版 三	2調査区 第1面	
図版 四	2調査区 第1面北部遺構検出状況	
	2調査区 第1面南部遺構検出状況	
図版 五	2調査区 S E 102検出状況	
	2調査区 第2面遺構検出状況	
図版 六	2調査区 第3面遺構検出状況	
図版 七	2調査区 S K 301検出状況	
	2調査区 S K 302検出状況	
	2調査区 S K 305検出状況	
図版 八	1調査区 S K 101、2調査区畔101盛土内、S D 105、S K 202出土遺物	
図版 九	2調査区 S K 301、S K 302、S K 304、S K 305、S D 301出土遺物	
図版一〇	2調査区 S D 301、S D 306出土遺物	
図版一一	2調査区 第4層、第5層出土遺物	

第1章 はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市北西部を中心とする東西約1.7km、南北約1.8kmの広い範囲に及ぶ縄文時代晚期から近現代にかけての複合遺跡である。現在の行政区画では、北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・洪川町1～7丁目・龍華町1～2丁目・北龟井町1～3丁目、および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目が遺跡の範囲である。南は跡部遺跡・亀井遺跡、西は亀井北遺跡・加美遺跡、北は佐堂遺跡と隣接している。遺跡範囲内には、久宝寺寺内町遺跡・渋川庵寺が所在する。

久宝寺遺跡が立地する中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部に当たり、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下している。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた沖積地に展開した遺跡で、遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+6.6～12.0mを測る。

今回、久宝寺遺跡第30次調査を実施した調査地は、久宝寺遺跡の南部に当たり、遺跡を東西に横断する形で占地している国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)とその周辺を含む「大阪竜華都市拠点地区」の範囲内にある。「大阪竜華都市拠点地区」においては、平成9(1997)年度以降、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、新設道路部分および公共施設建設地を中心とした発掘調査が、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター、以下、府センターとする)・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、当調査研究会とする)によって継続的に実施されている。

本書で報告する久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30)は、上記事業の一環として、当調査研究会が都市基盤整備公团関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)の委託を受けて、平成11年度に実施したものである。調査区は2箇所で東西に分かれており、その距離は約700mを測る。西側の調査区を1調査区(KH99-30-1)、東側の調査区を2調査区(KH99-30-2)と呼称した。1調査区周辺では、北に隣接して第23次調査1調査区(KH97-23-1)の調査が、東接する位置では、府センターによる水処理施設に伴う調査が実施されており、縄文時代晚期以降の遺構・遺物が検出されている。2調査区周辺では、北に隣接して第23次調査26調査区(KH97-23-26)、南に隣接して第24次調査8調査区(KH98-24-8)の調査が当調査研究会により実施されており、古墳時代初頭以降の遺構・遺物が検出されている。この様に、調査区付近では数多くの調査が実施されており、縄文時代晚期以降の多岐に亘る多くの考古学成果の蓄積が認められている。なお、久宝寺遺跡における既往調査の概要、および久宝寺遺跡周辺の地理的・歴史的環境の詳細については、本書「I 久宝寺遺跡第23次調査」第2章(2～9頁)を参照されたい。



写真1 2調査区 調査風景(南から)



第1図 調査地周辺図 (S=1/5000)

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第30次調査は、「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」に伴うもので、そのうち、植松排水路他工事部に伴う調査を第30次1調査区(KH99-30-1)、久宝寺南駅前線3工区に伴う調査を第30次2調査区(KH99-30-2)と呼称した。

1調査区は、龍華町2丁目の竜華操車場跡地の西部に位置し、平面形状は頭を東に向かた凸字形を呈する。2調査区は、龍華町1丁目の竜華操車場跡地の東部に位置し、概ね南北に長軸を持つ長方形を呈する。1調査区は、第23次調査1調査区(KH97-23-1)の南側に、2調査区は、第23次調査26調査区(KH97-23-26)の南側に隣接している。総調査面積は893.0m²を測る。

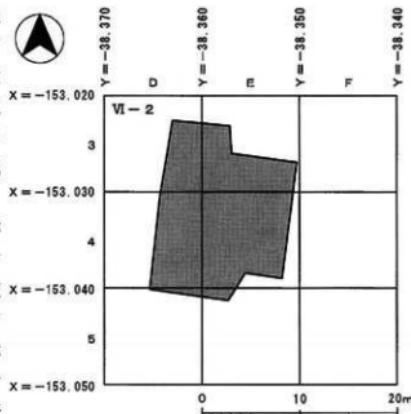
現地調査は、都市基盤整備公団関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)と八尾市教育委員会と当調査研究会の3者による「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、都市基盤整備公団関西支社と当調査研究会による業務委託契約書の締結後着手した。各調査区の面積・現地調査期間・調査担当者については、第1表にまとめた。内業整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成17年3月28日に終了した。

現地調査に際しては、八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に示された試掘調査の結果に基づき、掘削深度等を設定した。1調査区については、現地表(T.P. +8.00m)から2.27mまでを機械掘削した後、以下0.66mを人力掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。その際、工事の都合上、調査区を2つに分けて調査を行なった。西側をその1、東側をその2とした。先ず、その1の調査を行い、その1の調査終了後、埋め戻し、その2の調査を行なった。2調査区では、上部調査として、現地表(T.P. +9.5m)から0.9~1.3

m前後までを機械掘削した後、以下0.6m前後を人力掘削し、遺構・遺物の検出に努め、下部調査として、約1.0mに及び人力掘削し、遺構面・遺物包含層の確認、地層の状況から復元される遺跡形成以前の環境等を確認するための調査を行なった。調査区の四方には、地層観察用の壁(幅約0.5m)を設定している。

調査地の地区割については、竜華操車場跡地とその周辺において継続する調査に対応するため、平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した。地区割の設定については、本書「I 久宝寺遺跡第23次調査」第3章第1節(15頁)を参照されたい。この地区割では、1調査区が中区画のVI-2地区に、2調査区がVII-13・14・18・19地区に包括される。

遺構検出面の呼称については、機械掘削が 第2図 1調査区 設定図および地区割図(S=1/500)



終了し、人力掘削による調査で遺構を検出した面を「第1面」と呼称し、以下、上位の遺構検出面から順に番号を付した。遺構名については、遺構略号+遺構検出面番号+遺構番号(2桁)で表現した(例、SK 101=第1面検出の土坑1)。

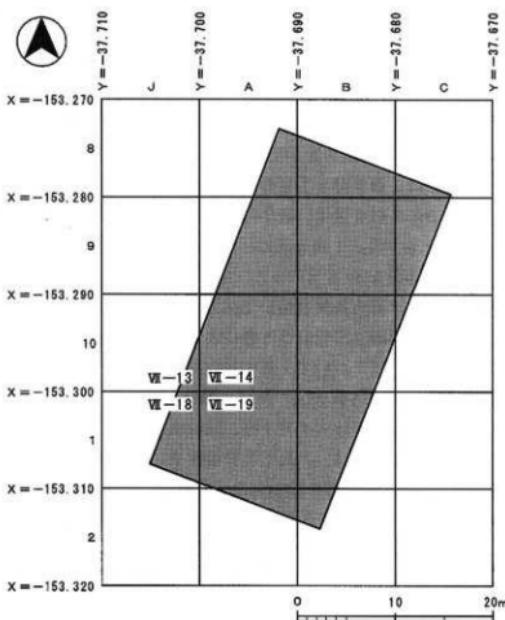
調査の結果、1調査区では、古墳時代後期に比定される土坑1基(S K 101)、溝1条(S D 101)を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)で1箱を数える。

2調査区では、上部調査で3面(第1面～第3面)に亘る調査を実施した。第1面では、近世初頭以降に比定される鳥畠2基(鳥畠101・鳥畠102)、水田1筆(水田101)、畦畔1条(畦畔101)、井戸3基(S E 101～S E 103)、土坑1基(S K

101)、溝20条(S D 101～S D 120)、小穴14個(S P 101～S P 114)、第2面では、中世末期及び近世初頭以降に比定される土坑3基(S K 201～S K 203)、溝12条(S D 201～S D 203)、第3面では、古墳時代中期～平安時代後期に比定される土坑8基(S K 301～S K 308)、溝32条(S D 301～S D 332)、小穴2個(S P 301・S P 302)を検出した。下部調査では、自然河川・地震痕跡(液状化に伴う砂脈やフレーム構造)を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)6箱を数える。

第1表 調査区一覧表

調査区名(略号)	面積(m ²)	調査期間	担当者
1調査区(K H99-30-1)	202.0	平成12年1月25日～2月8日	西村公助
2調査区(K H99-30-2)	691.0	平成12年2月1日～3月7日	原田昌則・岡田清一



第3図 2調査区 設定図および地区割図(S=1/500)

第2節 1 調査区

1) 基本層序

現代までの地層が比較的良好に残っていた調査区西壁から12層(第0層～第11層)を抽出して当調査区における基本層序とした。

- 第0層：竜華操車場造成時の客土。層厚1.1～1.5m。上面の標高は、T.P.+8.0m前後を測る。
- 第1層：10BG3/1暗青灰色細粒砂混粘土。竜華操車場造成以前の耕作土。層厚0.05～0.15m。
- 第2層：2.5Y5/6黄褐色細粒砂混粘土。層厚0.1～0.25m。
- 第3層：10YR4/2灰黃褐色粗粒砂混粘土。層厚0.1～0.2m。
- 第4層：10YR5/1褐灰色粗粒砂混粘土。層厚0.1～0.2m。
- 第5層：10YR6/6明黃褐色細粒砂混粗粒砂。層厚0.45～0.95m。
- 第6層：5Y4/1灰色シルト混粘土。層厚0.1m。
- 第7層：N3/0暗灰色粘土。植物遺体を含む。層厚0.1m。
- 第8層：2.5Y3/2黒褐色粘土。炭酸鉄を含む。層厚0.1～0.3m。
- 第9層：10BG4/1暗青灰色粘土。層厚0.2m。上面は第1面、古墳時代後期の遺構を検出。
- 第10層：5B3/1暗青灰色粘土。植物遺体を多く含む。層厚0.3m。
- 第11層：10BG6/1青灰色粘土。層厚0.2m以上。

2) 検出遺構と出土遺物

第1面(第6図、図版一・二)

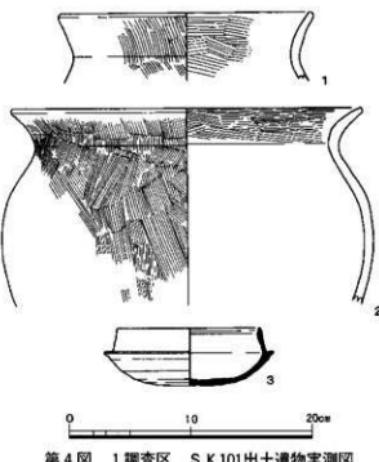
現地表下約2.5m(T.P.+5.5m前後)の第9層上面で、古墳時代後期に比定できる土坑1基(SK101)、溝1条(SD101)を検出した。

土坑(SK)

SK101(第4・5図、図版二・八)

1調査区(その2)のほぼ中央部のVI-2-4E地区で検出した。平面は不整円形を呈し、長径2.6m、短径2.3mを測る。断面は浅い皿形で、深さ0.1mを測る。埋土は、粘土を主体とする2層からなる。

出土遺物は、埋土の上部(1層)から土師器壺・土師器瓶、須恵器杯身の小片および自然木等が少量出土している。3点(1～3)を図化した。1・2は共に土師器長胴壺の小破片である。復元口径は1が20.5cm、2が26.0cmを測る。器面調整は共に口縁部から体部外間に縱位のハケ、口縁部内面に横位のハケを施す。色調は1が灰褐色、2が浅黄橙色。3は須恵器杯身である。約1/2が残存している。復元口径11.6cm、



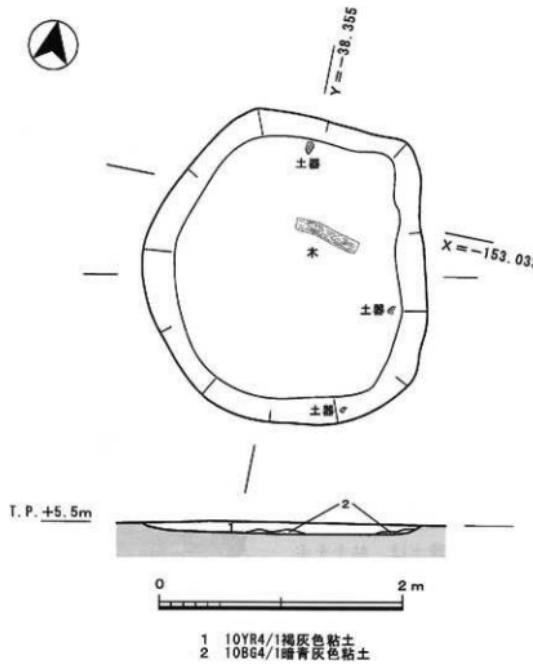
第4図 1調査区 SK101出土遺物実測図

器高4.7cm、受部径14.0cmを測る。色調は淡灰青色。田辺昭三氏編年(田辺1966)のMT15型式(6世紀前半)に比定される。埋没時期は、出土遺物から6世紀前半以降に比定できる。

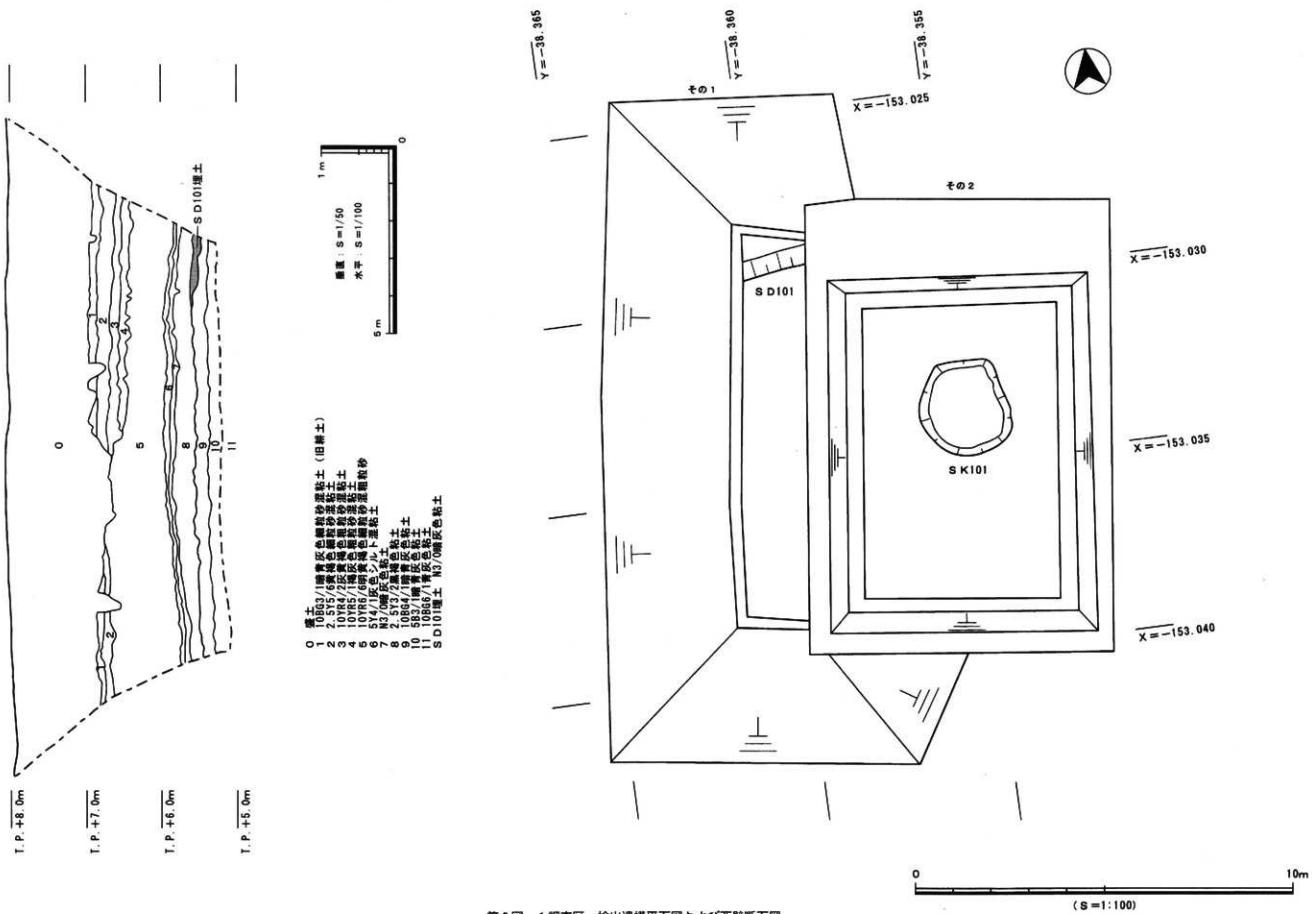
溝(S D)

S D101

1調査区北西側のVI-2-3D・E地区で検出した。東西方向に伸びるものと推定されるが、南肩のみの検出で規模等は明確でなく、東側に落ち込む落ち込み、あるいは、土坑の一部を検出した可能性がある。検出部分で、長さ1.7m、最大幅1.1m、深さ0.15mを測る。埋土はN3/0暗灰色粘土の単層である。遺物が出土していないため、帰属時期は不明である。



第5図 1調査区 S K101平面面図



第6図 1調査区 掘出遺構平面図および西壁断面図

第3節 2調査区

1) 基本層序

上部調査の範囲で確認した8層(第0層～第7層)を摘出して当調査区の基本層序とした。下部調査では自然河川を中心とした地層を32層(1層～32層)確認した。詳細は第8図に記載している。

第0層：竜華操車場造成時の客土。層厚0.85～1.2m。上面の標高はT.P.+9.5～9.1m。

第1層：10BG4/1 暗青灰色砂質シルト。竜華操車場造成以前の耕作土。層厚0.1～0.3m。

第2層：10BG5/1青灰色板粗粒砂混粘土質シルト。グライ化。水田耕作土。層厚0.1～0.2m。

第3層：N6/0灰色砂質シルト。層厚0.05～0.25m。酸化鉄が斑状に沈着。第2層の水田耕作土に伴う耕盤層。

第4層：10YR7/3にぶい黄橙色砂質シルト。層厚0.05～0.2m。上部が土壤化しており、層中に斑状の酸化マンガン・管状の酸化鉄が沈着している。古墳時代中期～平安時代後期の遺物を含む。上面が第1面の一部と第2面。

第5層：2.5Y7/2灰黄色シルト～極細粒砂。層厚0.1～0.3m。酸化鉄が管状に沈着。上面が第1面の一部と第3面。

第6層：10YR6/4にぶい黄橙色シルト～極細粒砂。層厚0.05～0.2m。上部が土壤化しており、酸化マンガン・酸化鉄が斑状に沈着。

第7層：10GY8/1明緑灰色極細粒砂。層厚0.2m以上。酸化鉄が斑状に沈着。

島畠101盛土

A層：10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト。酸化鉄。上面が第1面。

B層：10YR7/4にぶい黄橙色砂質シルト。酸化鉄。

C層：10YR6/2灰黄褐色砂質シルト。酸化鉄。

D層：10YR5/2灰黄褐色砂質シルト。酸化鉄。

E層：5Y7/2灰白色砂質シルト。酸化鉄。

F層：5Y6/2灰オリーブ色砂質シルト。酸化マンガン・酸化鉄。瓦器塊を含む。

島畠102盛土

G層：2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト。上面が第1面。

2) 検出遺構と出土遺物

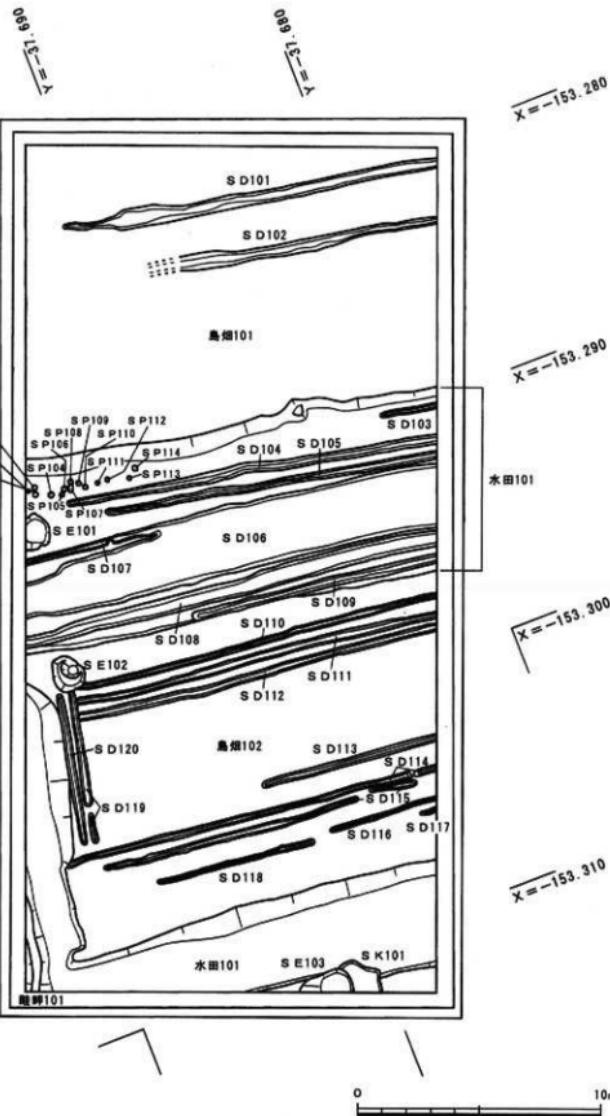
第1面(第7図、図版三)

調査の結果、1～3層を除去した、主に第4層上面(T.P.+8.4～7.8m)で、江戸時代前半以降に比定される島畠2基(島畠101・島畠102)、水田1筆(水田101)、畦畔1条(畦畔101)、井戸3基(S E101～S E103)、土坑1基(S K101)、溝20条(S D101～S D120)、小穴14個(S P101～S P114)を検出した。

島畠(島畠)

島畠101

2調査区の北部のⅦ-14-8・9 A～C地区で検出した。南部は水田101に区画されているが、北・東・西部は調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部分で東西幅17.3m、南北幅



第7図 2調査区 第1面検出構造平面図 (S=1/200)

X = -153.310

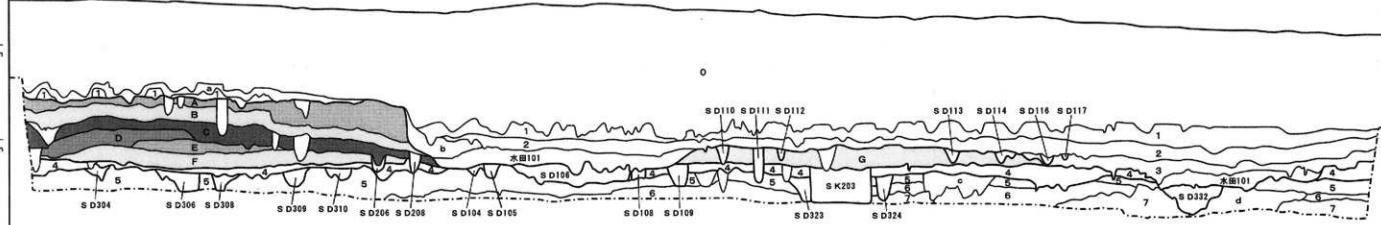
I 上部調査(調査区東壁)

X = -153.290

X = -153.300

T.P.+9.0m

T.P.+8.0m

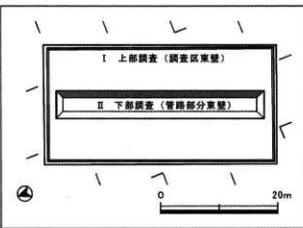


【I 上部調査】

- 0層 実地盤
- 1層 10YR6/1暗赤褐色砂質シルト
- 2層 10YR6/2褐色粘土質シルト
- 3層 N6/6褐色砂質シルト
- 4層 10YR6/2褐色粘土質シルト
- 5層 2.5Y/2灰褐色シルト・粗粒砂
- 6層 10YR6/4にぶい黃色砂質シルト・粗粒砂
- 島崎101号井/明赤褐色粗粒砂
- 島崎102号井/明赤褐色粗粒砂
- 島崎103号井/明赤褐色粗粒砂
- A層 10YR6/4にぶい黃色砂質シルト
- B層 10YR6/2褐色粘土質シルト
- C層 10YR6/2褐色粘土質シルト
- D層 10YR5/2褐色粘土質シルト
- E層 5Y6/2褐色シルト
- F層 5Y6/2褐色シルト
- G層 2.5Y6/3にぶい黃色砂質シルト

水田101 水井
水田102 水井
水田103 水井
a層 5Y6/1青褐色砂質シルト
b層 5Y6/1青褐色砂質シルト
c層 5Y6/1褐色粘土質シルト
d層 10YR7/1褐色粘土質中粒砂・粗粒砂

※小規模な遺構遺跡については記載を省いたが、
概要は、褐色系の砂質シルトである。



水平: S=1/40
垂直: S=1/80

4m 0 20m

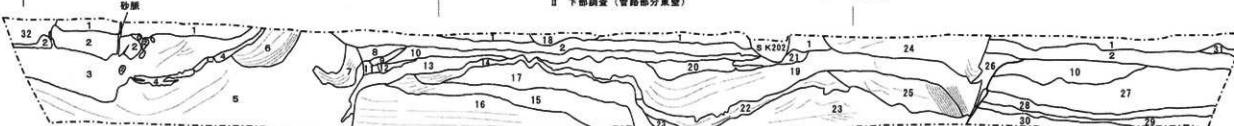
X = -153.280

X = -153.290

II 下部調査(管路部分東壁)

X = -153.300

T.P.+7.0m



【II 下部調査】

- 1層 10YR8/2黄赤褐色砂質シルト・酸化マグン・酸化鉄(斑点状)
- 2層 10YR8/2褐色砂質シルト・酸化鉄(斑点状)
- 3層 10YR8/2褐色砂質シルト・酸化鉄(斑点状)
- 4層 10YR5/1緑灰色シルト・植物遺体を含む
- 5層 N5/0褐色中粒砂・細粒砂・液化化したるフレーム構造
- 6層 10YR6/1褐色中粒砂・細粒砂・液化化したるフレーム構造
- 7層 N7/0褐色シルト・黄粘土・処理が施された
- 8層 10YR6/1褐色砂質シルト・酸化鉄(斑点状)
- 9層 10YR6/1褐色砂質シルト・酸化鉄(斑点状)
- 10層 7.5Y6/1灰褐色粗粒砂
- 11層 10YR5/1褐色砂質シルト
- 12層 10YR6/1褐色砂質シルト
- 13層 10YR6/1褐色砂質シルト・葉理が見られる
- 14層 N5/0褐色シルト・葉理が見られる
- 15層 10YR6/1褐色砂質シルト・葉理が見られる
- 16層 10YR6/1褐色砂質シルト・葉理が見られる
- 17層 10YR8/1明赤褐色粗粒砂・斜交葉理・板状葉理が見られる
- 18層 7.5Y5/1灰褐色砂質シルト
- 19層 北部: 10YR6/1明赤褐色シルト・液化粗粒砂・葉理が見られる
中部: 10YR6/1褐色砂質シルト・液化粗粒砂・葉理が見られる
- 20層 2.5Y7/1褐色中粒砂・粗粒砂
- 21層 5Y7/1褐色中粒砂・粗粒砂
- 22層 10YR6/1褐色砂質シルト
- 23層 N8/0白色粗粒砂
- 24層 2.5Y7/1明赤褐色粗粒砂・葉理が見られる
- 25層 2.5Y7/1明赤褐色粗粒砂・葉理が見られる
- 26層 10YR6/1褐色砂質シルト・葉理が見られる
- 27層 10YR6/1明赤褐色粗粒砂・葉理が見られる
- 28層 2.5Y7/1褐色中粒砂
- 29層 N5/0褐色シルト
- 30層 10YR6/1褐色砂質シルト
- 31層 N8/0白色粗粒砂
- 32層 N8/0白色中粒砂・粗粒砂

第8図 2調査区 東壁および管路部分東壁断面図

12.7m、高さ0.7m前後を測る。島畠101は第4層上面にF層・E層・D層・C層・B層・A層の6層を盛土して構築されている。盛土内からは土師器・須恵器・瓦質土器・肥前系陶磁器などの破片が出土している。A層の上面で溝2条(S D101・S D102)を検出した。また調査区東壁断面の観察から、D層・C層・A層の上面に切り込み面を持つ断面形がU字形の造構があることを確認できる。このことから、島畠101は盛土を重ねながら耕作が続けられていたことが窺える。構築時期は、盛土内から出土した遺物から、近世初頭以降に比定できる。

島畠102

2 調査区南部のⅦ-14-10 A・B地区、Ⅶ-18-1 J地区、Ⅶ-19-1 A・B地区で検出した。北側・西側・南側を水田101に区画されており、東部は調査区外に至る。規模は、検出部分で東西幅15.0m前後、南北幅12.0m、高さ0.2m前後を測る。第4層上面にG層を盛土して構築されている。盛土内からは、土師器・須恵器・瓦質土器・肥前系陶磁器などの破片が出土している。検出面で井戸1基(S E102)の他、鋤溝は東西方向に伸びる6条(S D110~S D118)と南北方向に伸びる2条(S D119・S D120)を検出した。S D116・S D117については、調査区東壁断面の観察から、第3層より上面から切り込まれていることが確認でき、S D116の延長線上にあるS D118とともに島畠102に伴う溝ではなく、島畠102が使われなくなつてからの水田耕作に伴う溝と考えられる。構築時期は、盛土内から出土した遺物から、近世初頭以降に比定できる。

水田（水田）

水田101

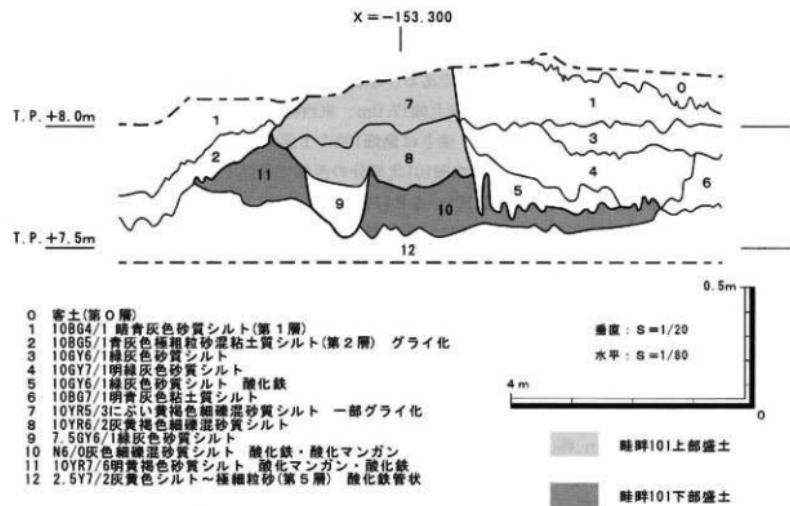
2 調査区南半部を中心とするⅦ-14-9 A~C地区、Ⅶ-13-10 J地区、Ⅶ-14-10 A・B・C地区、Ⅶ-18-1 J地区、Ⅶ-19-1 A・B地区、Ⅶ-19-2 A・B地区で検出した。島畠102を取り囲んでいる。調査区南西部では、その西側が畦畔101によって区画され、調査区南東部では、その南側が調査区南側に隣接する第24次調査8調査区で検出された島畠の北縁に接する。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。水田101の北部分は検出部分で東西幅16.7m、南北幅7.5~7.9m、西部分は検出部分で南北幅17.0m、東西幅3.60~4.25m、南部分は検出部分で東西幅12.0m、南北幅1.70~1.90m、深さは島畠102の上面から0.2m前後を測る。作土層は10BG7/1明青灰色粘土質シルトである。水田101北部分の西部で井戸1基(S E101)、北西部で東西方向に列状に分布する小穴14個(S P101~S P114)、東西方向に伸びる溝7条(S D103~S D109)を検出した。作土層からの出土遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・屋瓦・国産陶器・肥前系陶磁器の破片である。構築時期は、出土遺物と島畠101・島畠102との関連性から、近世初頭以降に比定できる。

畦畔（畦畔）

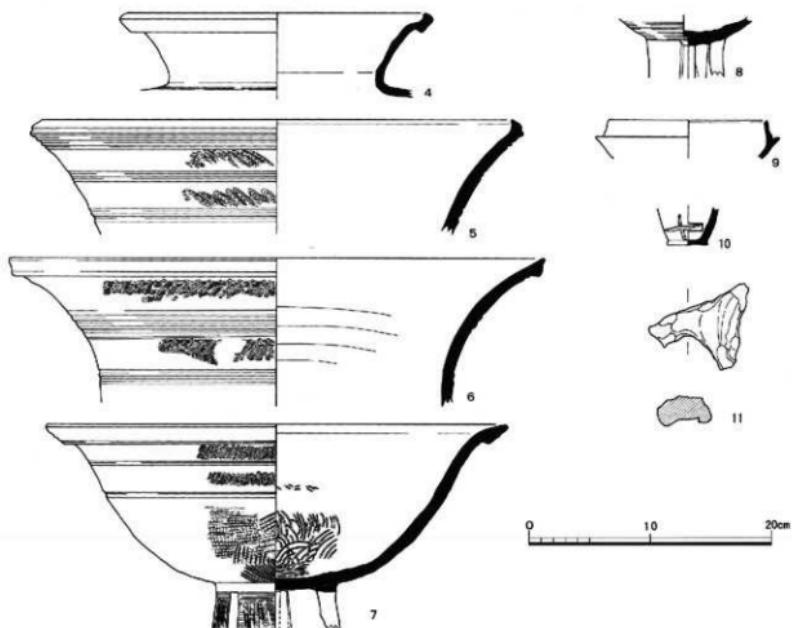
畦畔101（第9・10図、図版八）

2 調査区南西部のⅦ-18-1 J地区で検出した。南北方向に伸び、東側は水田101西部分を区画している。検出長3.8m、幅0.6m、高さ0.3mを測る。畦畔101は第4層上面に構築されており、盛土については第9図の通りである。南側・北側は調査区外に至るが、南側は当調査研究会による第24次調査8調査区で検出された畦畔に続き、北側は調査地西側に隣接する当調査研究会によ

る第48次調査で検出された畦畔状遺構に続く。畦畔盛土内からは遺物が集中して出土しており、周辺の水田および島畝構築時に出土した遺物の廃棄および畦畔の補強を目的として意識的に畦畔盛土内に埋められた遺物である。整理用コンテナ1箱程度出土しており、時期的には古墳時代中期～近世のものが含まれている。8点(4～11)を図化した。4～10は甕口縁部の小破片である。4は中形品で、口縁部は外方に拡張して外傾する幅広の端面を形成している。田辺編年のT K209型式(7世紀前半)前後のものか。5・6は大型品で、口縁端部が外傾して幅広の端面を作る5と口縁端部を垂下させ内傾する端面を形成する6がある。口縁部外面には、共に2～3条を1単位とする沈線帯で区画された間に波状文が施文されている。色調は5が灰白色。6は淡灰色で半邊元焼成である。共に田辺編年のT K47型式(5世紀後半)前後のものか。7は器台で、脚部の上半以下を欠く。復元口径37.6cmを測る。台部はやや深めの楕形で、口縁部は外方に拡張し、内傾する幅広の端面を形成している。台部外面上位には2本の沈線で区画された間に波長の細かい波状文、中位以下には格子タタキが施されている。台部内面の中位から底部に青海波タタキが施されている。脚部は細身で、脚部上位の復元径は10.0cmを測る。脚部外面にカキメの後、雑な波状文が施文されている。スカシ孔は長方形で4方に穿たれている。色調は青灰色。6世紀前半に比定される。8は高杯で、杯底部から脚部上半が残存している。杯部外面下半にカキメが施されている。スカシ孔は4方に穿たれている。脚部外面に灰かぶりが認められる。5世紀末～6世紀前半に比定される。9は杯身の小破片で、口縁部の約1/6が残存している。色調は青灰色。田辺編年のMT15型式(6世紀前半)。10は小形壺である。体部中位以下が残存している。底部は小さく突出した平底で、裏面に回転糸切り痕が残る。体部外面下半にヘラ先による「十」の字が記されている。平安時代前半のものか。11は土馬である。胸部から後足にかけて残



第9図 2調査区 畦畔101断面図(西壁部分)



第10図 2調査区 畦畔101盛土内出土遺物実測図

存しているが、後足および尾部の先端部分を欠く。裸馬を表現したもので、小笠原好彦氏分類（小笠原1975）のE型式にあたるものと推定され、時期的には奈良時代中期～後期に比定される。畦畔の構築時期は、出土遺物と島畠101・島畠102との関連性から、近世初頭以降に比定できる。

井戸（S E）

S E 101

2調査区北西部のⅧ-14-9A地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.1m、南北幅1.4m、深さ0.35mを測る。埋土は3層に分けられ、上層から2層までが砂質シルト、最下層が粘土質シルトを主体とする。調査区西壁断面の観察から、水田101の作土層より上面から掘り込まれていることが確認できる。出土遺物は、土師器・須恵器・井戸側用瓦・国産陶器の破片が極少量である。構築時期は、近世前半に比定できる。

S E 102（第11図、図版五）

2調査区西部のⅧ-14-10A地区、島畠102の北西隅で検出した。島畠102の北西角に位置する。不整円形で東西幅1.3m、南北幅1.5m、深さ0.77mを測る。埋土は、第11図の通りである。検出面から約0.3m下部に桶の底板が完存していることから、井戸の機能が終了した後に肥溜めとして利用されていたと推測される。出土遺物は、土師器・須恵器・肥前系陶磁器・井戸側用瓦の破

片である。構築時期は、近世初頭以降に比定できる。

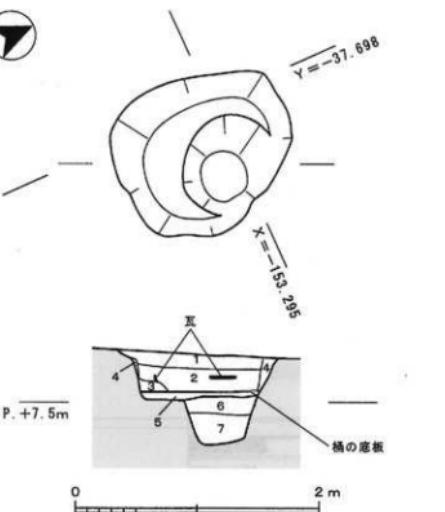
S E 103

2調査区南東部のVII-19-2 A地区で検出した。SK101・水田101を切る。南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅2.2m、南北幅1.15m、深さ0.41mを測る。埋土は灰色系の砂質シルトを主体とする3層に分けられる。出土遺物はない。構築時期は、近世初頭以降に比定できる。

土坑(S K)

SK 101

2調査区南東部のVII-19-2 A地区で検出した。水田101を切りSE103に切られる。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.5m、南北幅1.7m、深さ0.1mを測る。埋土は10BG7/1明青灰色粘土質シルトの単層である。遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土している。構築時期は、水田101を切りSE103に切られることから、近世初頭以降に比定できる。



第11図 2調査区 S E 102断面図

- 1 10BG7/1明青灰色砂質シルト
- 2 N6/0灰色砂質シルト
- 3 N7/0白色中粒砂混シルト
- 4 2.5SY8/1灰白色砂質シルト
- 5 N7/0白色中粒砂混シルト
- 6 10BG8/1青灰色粘土質シルトと10YR6/6明黄褐色極細粒砂の互層
- 7 10BG5/1青灰色粘土質シルト

溝(S D) (第12図、図版八)

総数で20条(S D101～S D120)を検出した。規模の大きいSD106を除けば幅0.2～0.8m程度の小溝である。そのうち、SD101・SD102が島畑101、SD103～SD109が水田101、SD110～SD115・SD119・SD120が島畑102、SD116～SD118が第2層を作土とする耕作に伴う溝と考えられる。各溝の規模・埋土・出土遺物については第2表に示した。

SD105出土遺物 軒平瓦1点(12)を図化した。瓦当面に向かって右半分が残存している。中心飾りに縦方向の菱形を有し、単位の細かい唐草文を上下二段に配する菱形唐草文軒平瓦である。中心飾りの菱形は、4分割され、そのうちの上下について縦線でさらに分割された文様となっている。外区はやや低めで、上外区が下外区に比して幅が広い。脇区は上下外区に比して幅狭である。瓦当面に離れ砂が認められる。頸は浅段頸である。色調は灰色。時期は鎌倉時代。東大阪市の若江寺跡(藤井1975)から同様のものが出土している。



第12図 2調査区 S D 105出土遺物 実測図

第2表 2調査区 第1面溝(SD)法量表(単位m)

遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅	深さ	埋 土	出土遺物
SD101	W-14-8A-B、9B-C	15.4	0.40~0.80	0.05	10YR6/2灰黃褐色砂質シルト	肥前系磁器
SD102	W-14-9B-C	10.6	0.25~0.65	0.05	10BG6/1青灰色砂質シルト	土師器・墨瓦
SD103	W-14-9~10B-C	1.70	0.20	0.08	タ	土師器
SD104	W-14-9A-B、10B	14.7	0.40	0.14	タ	土師器・須恵器・瓦器
SD105	W-14-9A、10A-B	13.0	0.30	0.08	タ	土師器・須恵器・瓦器
SD106	W-14-10A-B	13.5	1.40~2.60	0.07	タ	土師器・須恵器・瓦器
SD107	W-14-10A	4.90	0.20~0.40	0.05	タ	
SD108	タ	16.3	0.40~0.80	0.09	タ	
SD109	タ	9.60	0.35	0.11	タ	土師器・須恵器・磁器
SD110	タ	15.1	0.25~0.30	0.12	2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト	土師器・須恵器
SD111	タ	15.0	0.25~0.38	0.05	タ	土師器・須恵器
SD112	タ	15.0	0.25~0.35	0.06	タ	土師器
SD113	W-19-1A-B	7.30	0.25~0.30	0.10	タ	土師器・須恵器・瓦器
SD114	タ	15.4	0.25~0.30	0.09	タ	土師器
SD115	タ	13.2	0.25~0.30	0.07	タ	土師器
SD116	W-19-1B	4.50	0.15~0.20	0.05	タ	
SD117	タ	0.70	0.20	0.04	タ	土師器
SD118	W-19-1A	6.60	0.15~0.25	0.04	タ	土師器・須恵器
SD119	W-14-10A、19-1A	6.30	0.20~0.35	0.08	タ	
SD120	タ	6.30	0.25~0.30	0.08	タ	

小穴 (SP)

全て2調査区北西部のW-14-9 A地区で検出した。水田101の北西部に集中している。総数は14個(S P101~S P114)である。各小穴の平面形状・埋土については、第3表に示した。埋土が第2層と同じであることから、構築面は第2層上面にあったと考えられる。出土遺物はない。これらの小穴は、水田の端で列状に分布することから、水田耕作に伴う施設を作る際に打ち込まれた杭穴と推定される。各小穴の法量等については、第3表に示した。

第3表 2調査区 第1面小穴(SP)法量表(単位m)

遺構名	平面形	長径(長辺)	短径(短辺)	深さ	埋 土	出土遺物
S P101	円形	0.13	0.13	0.06	10BG5/1青灰色砂質シルト	
S P102	タ	0.18	0.18	0.09	タ	
S P103	タ	0.15	0.15	0.09	タ	
S P104	タ	0.16	0.16	0.08	タ	
S P105	タ	0.15	0.15	0.07	タ	
S P106	タ	0.16	0.16	0.07	タ	
S P107	長方形	0.28	0.17	0.08	タ	
S P108	方形	0.17	0.17	0.08	タ	
S P109	タ	0.15	0.15	0.07	タ	
S P110	タ	0.15	0.15	0.15	タ	
S P111	円形	0.15	0.15	0.05	タ	
S P112	タ	0.15	0.15	0.07	タ	
S P113	タ	0.14	0.14	0.16	タ	
S P114	梢円形	0.20	0.16	0.13	タ	

第2面(第14図、図版五)

調査の結果、第4層上面(T.P.+7.7m前後)で、土坑3基(S K 201~S K 203)、溝12条(S D 201~S D 212)を検出した。

土坑(S K)

S K 201

2調査区中南部のⅦ-14-10A・Ⅶ-19-1A地区で検出した。平面は不定形で、東西幅3.5m、南北幅3.3m、深さ0.42mを測る。底部に3箇所の窪みを有する。埋土は2層に分けられ、上層が2.5Y6/1黄灰色砂質シルト、下層が2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトである。遺物は土師器・須恵器・瓦器・中国製青磁碗などの小片が出上している。帰属時期は明確に比定できないが、中世以降島畠102の構築時期よりは前である。

S K 202(第13図、図版八)

2調査区東部のⅦ-14-10B地区で検出した。S K 201の北東4.3mの地点に位置する。隅丸方形で、東西幅1.5m、南北幅1.7m、深さ0.93mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が10YR4/2灰黄褐色砂質シルトと10YR6/1褐灰色砂質シルトの互層、下層がN7/0灰白色粘土質シルトである。出土遺物は、土師器・須恵器の小片である。須恵器2点(13-14)を図化した。13は杯身の小破片である。焼成がやや不良で、色調は灰白色を呈する。5世紀前半に比定されるが、小破片のため型式は不明。14は甕である。口縁部端部下半に突帯が廻る。頸部外面には中位の突帯を境に上下に波状文が施されている。口縁部内面は灰かぶり、外面には黒色釉が塗布されている。田辺編年T K85型式(5世紀前半)。遺構の帰属時期は5世紀前半が推定される。

S K 203

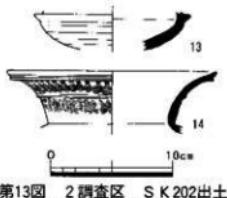
2調査区中南部のⅦ-14-10B地区・Ⅶ-19-1B地区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.4m、深さ0.6mを測る。埋土は不均質な10YR6/1褐灰色砂質シルトの単層である。出土遺物はない。帰属時期は明確に比定できないが、中世以降島畠102の構築時期よりは前である。

溝(S D)

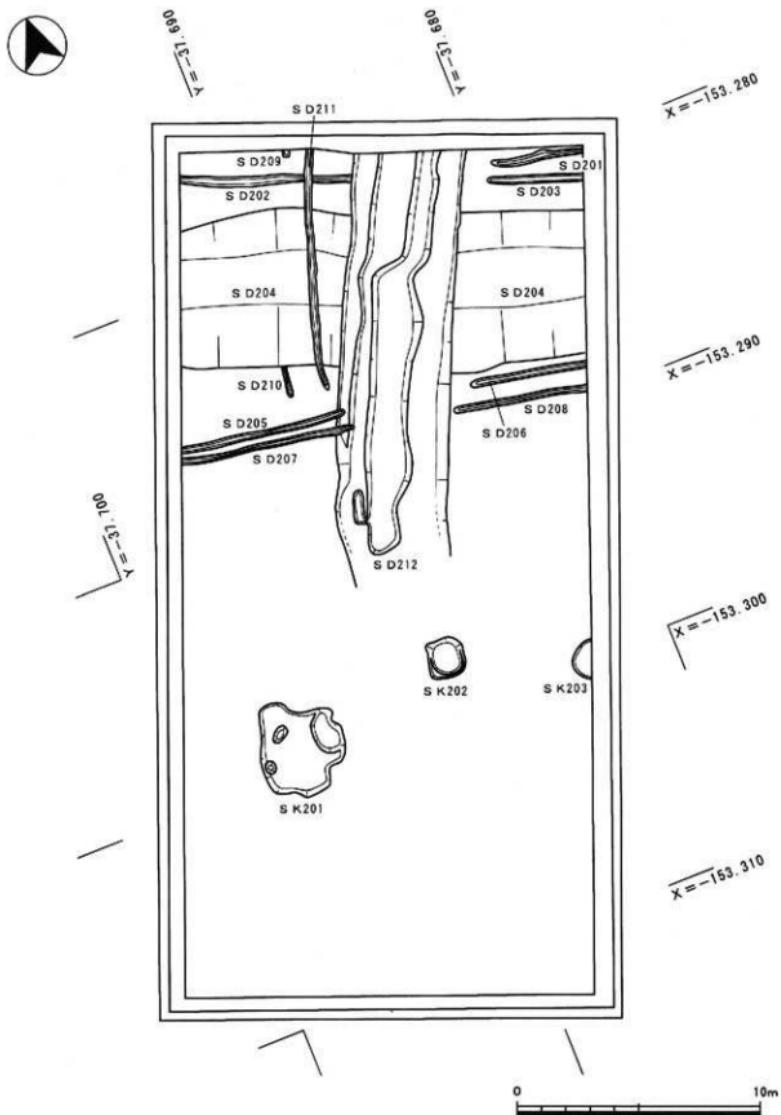
全て2調査区北側で検出した。総数は12条(S D 201~S D 212)である。規模の大きいS D 204およびS D 212を除けば、幅0.2~0.4m、深さ0.04~0.11m程度の小溝である。小溝は、調査区東壁断面の観察および埋土から、島畠101の耕作に伴う近世の溝であることがわかる。

S D 201

2調査区北東部のⅦ-14-8・9C地区で検出した。北西-南東方向に伸び、東側は調査区外に至る。検出長3.9m、幅0.3m、深さ0.04mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は、土師器・須恵器の小片が極少量出土しているが、時期を明確に比定できるものはない。



第13図 2調査区 S K 202出土
遺物実測図



第14図 2調査区 第2面検出遺構平面図(S=1/200)

S D 202

2調査区北西部のⅦ-14-8 A・B地区で検出した。北西-南東方向に伸び、東側はS D 212に切られ、S D 211に切られる。西側は調査区外に至る。検出長7.1m、幅0.3m、深さ0.04mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D 203

2調査区北東部のⅦ-14-9 C地区で検出した。S D 201の南側に並行して伸び、東側は調査区外に至る。検出長4.0m、幅0.28m、深さ0.07mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は土師器、須恵器の小片が極少量出土しているが、時期を明確に比定できるものはない。

S D 204

2調査区北部のⅦ-14-8 A・B、9 A～C地区で検出した。北西-南東方向に伸び、S D 211・S D 212に切られる。東側・西側は調査区外に至る。検出長16.7m、幅5.7～6.7m、深さ0.23mを測る。断面の形状は浅い皿状で、埋土は2層に分けられ、上層が2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト、下層が10YR5/1褐色灰色砂質シルトである。東部ほど浅くなり、調査区東壁断面では殆ど確認できない。遺物は土師器、須恵器、瓦器等の小片が出土している。

S D 205

2調査区北西部のⅦ-14-9 A・B地区で検出した。東西方向に伸び、東側はS D 212を切る。西側は調査区外に至る。検出長6.8m、幅0.27m、深さ0.06mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D 206

2調査区北東部のⅦ-14-9 B・C地区で検出した。東西方向に伸びる。東側は調査区外に至る。検出長4.8m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は須恵器の小片が極少量出土しているが、時期を明確に比定できるものはない。

S D 207

2調査区北西部のⅦ-14-9 A・B地区で検出した。S D 205の南側に並行して東西方向に伸び、東側はS D 212を切る。西側は調査区外に至る。検出長7.0m、幅0.24m、深さ0.04mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D 208

2調査区北東部のⅦ-14-9 B・C地区で検出した。S D 206の南側に並行して東西方向に伸び、東側は調査区外に至る。検出長5.5m、幅0.25m、深さ0.07mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は土師器、須恵器、瓦質土器の小片が極少量出土しているが、時期を明確に比定できるものはない。

S D 209

2調査区北部のⅦ-14-8 B地区で検出した。南北方向に伸びると推定される。検出長0.3m、幅0.25m、深さ0.03mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D 210

2調査区北西部のⅦ-14-9 A地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北側はS D 204に

切られる。検出長1.3m、幅0.2m、深さ0.09mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S D 211

2調査区北部のⅦ-14-8・9B地区で検出した。南北方向に伸びるもので、S D 202・S D 204を切る。北側は調査区外に至る。検出長10.0m、幅0.25m、深さ0.08mを測る。埋土は2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトの単層である。遺物は土師器、瓦質土器の小片が極少量出土したが、時期を明確に比定できるものはない。

S D 212

2調査区北部のⅦ-14-9・10A地区、Ⅶ-14-8～10B地区で検出した。南北方向に伸び、S D 202・S D 204を切り、S D 205・S D 207・水田101に切られる。北側は調査区外に至る。検出長18.0m、幅4.4m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR6/1褐色灰色砂質シルトの単層である。調査区北壁断面の観察によると、島畠101盛土のF層の上面に切り込み面が見られることから、島畠101の初期段階の島畠に伴う水田を構成する溝と考えられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器の小片が少量出土している。帰属時期は、出土遺物などから近世初頭以降に比定できる。

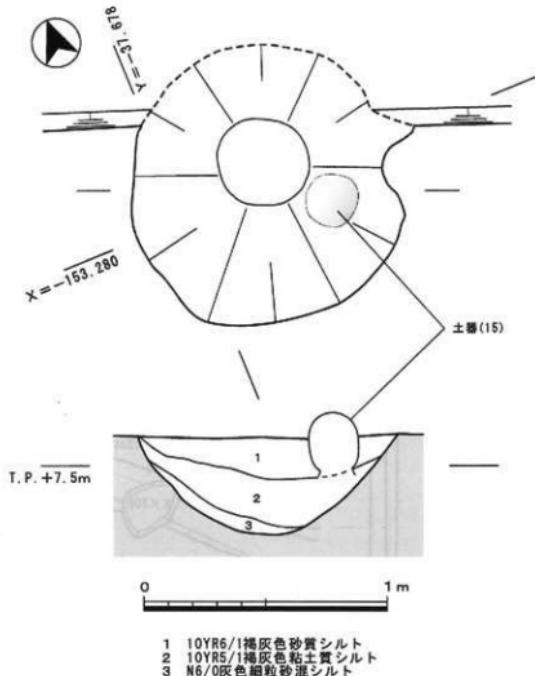
第3面(第16図、図版六)

第3面は第5層上面(T.P.+7.6m前後)で、古墳時代中期～平安時代後期に比定される土坑8基(S K 301～S K 308)、溝32条(S D 301～S D 332)、小穴2個(S P 301・S P 302)を検出した。

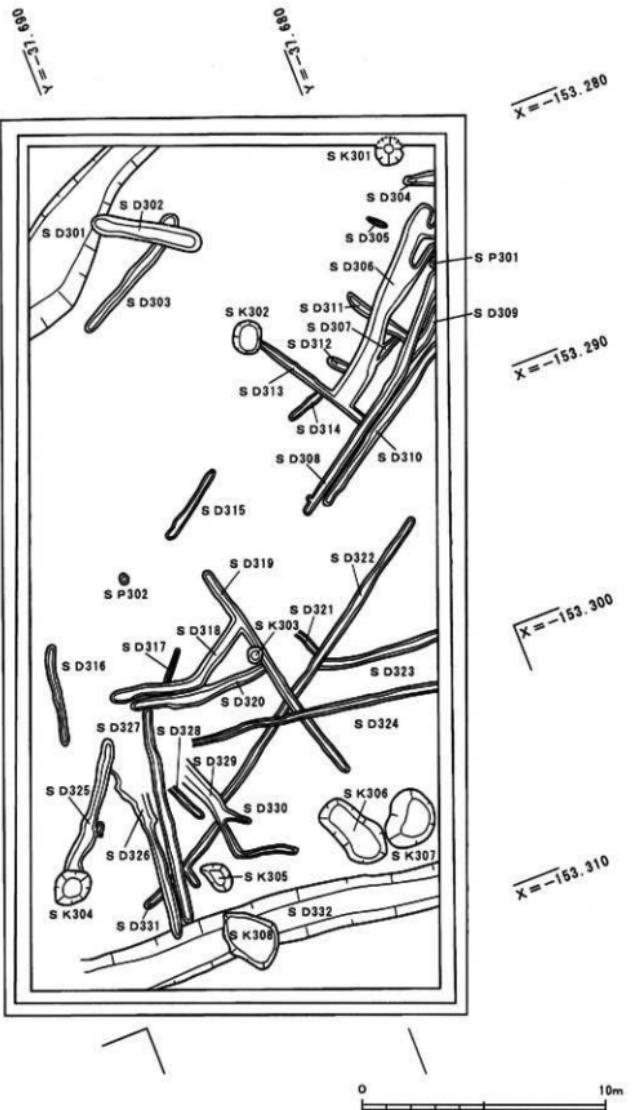
土坑(S K)

S K 301(第15・17図、図版七)

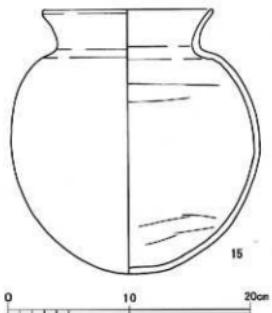
2調査区北東部のⅦ-14-9C地区で検出した。円形を呈するもので、検出部分で東西径1.07m、南北径1.1m、深さ0.4mを測る。埋土は半球形の断面形状に沿って3層が堆積している。1層から土師器臺が口縁部を下にした状態で出土している。土師器臺1点(15)を図化した。15は口縁部の一



第15図 2調査区 S K 301平面面図



第16図 2調査区 第3面検出構造平面図 (S=1/200)



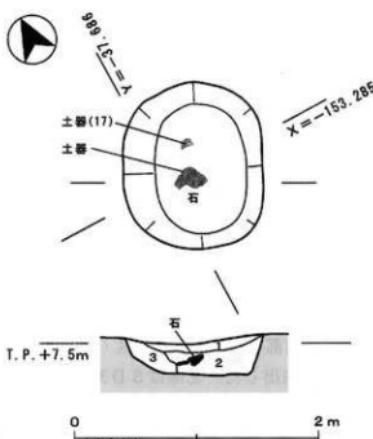
第17図 2調査区 S K 301出土物実測図

部を欠く以外は完存している。球形の体部に緩やかに外反する口縁部が付く。肩部に明瞭な段を形成している。口径13.8cm、器高21.8cm、体部最大径20.5cmを測る。外面の器面調整は口縁部ヨコナデ、体部は丁寧なナデを行う。体部外面中位以下に煤が付着している。色調は赤褐色。形態的には類例の少ない器種であるが、肩部に強いヨコナデにより段を形成する等の特徴から奈良時代のものと推定される。

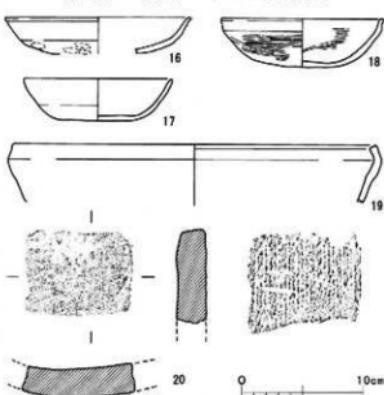
S K 302(第18・19図、図版七・九)

2調査区北部のVII-14-9B地区で検出した。SD313を切っている。南北方向にやや長い円形を呈するもので、長径1.3m、短径1.13m、深さ0.27mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は3層に分けられ、2層からは、平安時代前期に比定される土師器皿、楕・鉢、石材が出土している。5点(16~20)を図化した。16は土師器皿である。口縁部の約1/4が残存している。復元口径15.3cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はヘラ状工具の痕跡が認められる。

色調は赤褐色。17・18は土師器碗である。残存率は17が1/3、18が1/2である。18の体部内外面にはヘラミガキが施されている。色調は17が浅黄橙色、18が赤褐色で内面を中心に煤の付着が認められ、廃棄後に火炙したものと見られる。19は土師器大形鉢の口縁部である。復元口径27.0cmを測る。口縁部は「く」の字で、端部は内傾し小さな平坦面を作る。16~19の土器類は佐藤隆氏編年(佐藤1992)の平安時代Ⅰ期(8世紀末~9世紀初)に比定される。20は平瓦片である。凹面に細かい布目、



第18図 2調査区 S K 302断面図



第19図 2調査区 S K 302出土物実測図

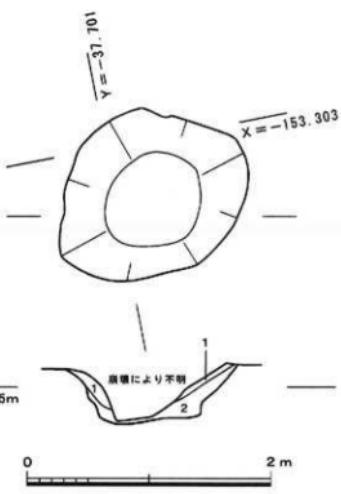
凸面には縫位に縄目タタキが施されている。出土遺物から、帰属時期は平安時代前期(8世紀末~9世紀初)が推定される。

S K 303

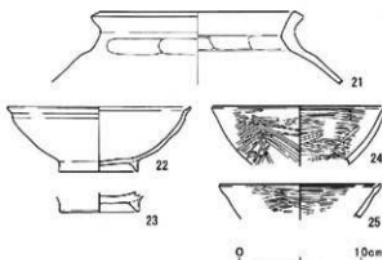
2調査区西部のⅦ-14-10A地区で検出した。東部がS D 319を切っている。円形を呈するもので、長径0.6m、短径0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は古墳時代後期と推定される壺1個体が出土している。

S K 304(第20・21図、図版九)

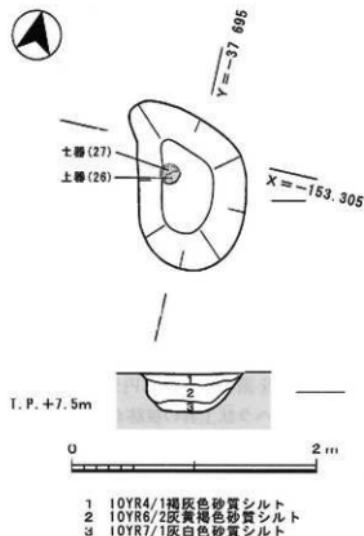
2調査区南部のⅧ-18-1J区・Ⅷ-19-1A地区で検出した。北部はS D 325を切っている。不整円形を呈するもので、東西幅1.35m、南北幅1.3m、深さ0.48mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って上層の10YR6/2灰黄褐色砂質シルトと下層の10YR7/1灰白色粘土質シルトの2層が堆積している。遺物は上層・下層から平安時代後期に比定される土師器壺・椀、黒色土器碗が出土している。5点(21~25)を図化した。21は土師器壺の小破片である。口縁部が「く」の字に屈曲する厚めの器壁を持つもので、口縁端部は外傾し、幅広の端面を形成している。体部上半は強いヨコナデにより、明瞭な稜を形成している。色調は淡赤褐色。胎土はやや粗く、3mm以下の長石・チャートが多く含む。22・23は土師器碗である。22は1/2以上が残



第20図 2調査区 S K 304平面断面図



第21図 2調査区 S K 304出土遺物実測図



第22図 2調査区 S K 305平面断面図

II 久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30)

存している。口径15.0cm、器高5.4cm、高台径6.4cmを測る。体部はやや深めで、口縁部は端部付近で小さく外折している。高台は貼り付け高台で、ほぼ垂直方向に貼り付けられており、端部は尖る。色調は灰白色である。23は高台部分である。完存しており、高台径6.3cm、高台高1.0cmを測る。色調は灰白色である。24・25は黒色土器B類の小破片である。口縁端部の形状は、丸みを持って終わる24と端部内面に沈線が廻る25がある。共に器面調整には横位のヘラミガキが行われている。佐藤編年の平安時代Ⅲ期新段階(11世紀前半)に比定される。

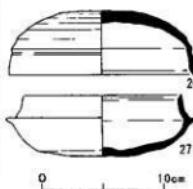
S K 305(第22・23図、図版七・九)

2調査区南部のVII-19-1 A地区
で検出した。平面は南北に長い楕円形を呈し、長径1.3m、短径0.85m、深さ0.32mを測る。埋土については、第22図の通りである。遺物は古墳時代後期前半に比定される土師器片、須恵器杯蓋・杯身等が出土している。そのうち埋土の最上部から出土した須恵器2点(26・27)を図化した。26は杯蓋で、約1/2が残存している。口径15.1cm、器高5.2cm、縦径14.9cmを測る。天井部が高く丸みを持つもので、口縁部は鈍い稜から下外方に長く伸びて口縁部端面内側に沈線を廻らす。色調は淡灰色。27は杯身で、1/2以上が残存している。口径13.0cm、器高5.1cm、受部径15.8cmを測る。やや深めで平坦な底部から、受部はやや斜上方に伸びる。立ち上がりは内傾して伸びた後、直立するもので端部内側に明瞭な段を形成している。色調は淡灰青色。田辯編年のMT15型式(6世紀前半)に比定される。

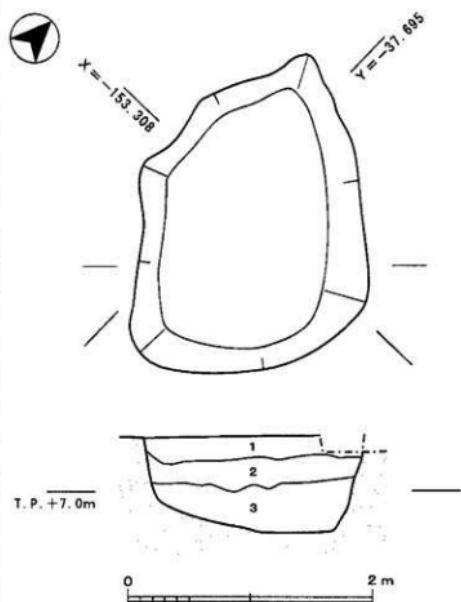
S K 306

2調査区南部のVII-19-1 A・B地

区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、長径5.98m、短径1.6m、深さ0.27mを測る。埋土は上層の1層・2層が砂質シルト～極細粒砂で、下部の3層は極細粒砂～中粒砂に砂質シルトがブロックに入る層相を呈している。遺物は出土していない。



第23図 2調査区 S K 305
出土遺物実測図



第24図 2調査区 S K 308平面図

- 1 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト
- 2 2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土質シルトと
2.5GY7/4浅黄色極細粒砂のブロック
- 3 N6/0灰色粘土質シルトと
N7/0灰白色極細粒砂のブロック

S K 307

2 調査区南東部のⅦ-19-1B 地区で検出した。S K 306の東に接している。やや不整の梢円形を呈するもので、長径2.2m、短径1.8m、深さ0.16mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って、下位から2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト・10YR6/1褐色灰色砂質シルトの2層が堆積している。遺物は出土していない。

S K 308

2 調査区南部のⅦ-19-1A 地区で検出した。S D 322を切っている。不整形を呈するもので、東西幅2.15m、南北幅1.8m、深さ0.79mを測る。埋土は第24回の通りであるが、上層を除いてブロックを含み不均質であるため、掘削後の比較的早い段階で埋戻しが行われたと考えられる。遺物は出土していない。

第4表 2調査区 第3面溝(S D)法量表

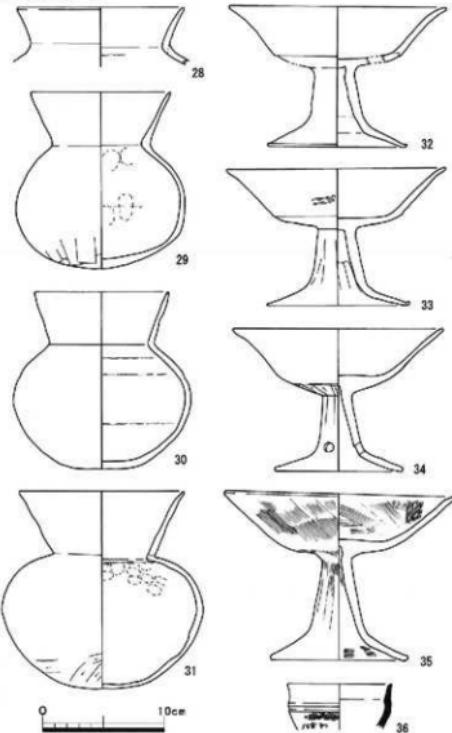
遺構名	地 区	全長 (検出長)	幅	深さ	埋 土	出土遺物
S D 302	Ⅶ-14-8B	4.5	0.80	0.12	10YR5/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器
S D 303	Ⅶ-14-8B, 9A-B	5.9	0.30~0.70	0.12	タ	土師器・須恵器
S D 304	Ⅶ-14-9C	1.2	0.40~0.55	0.08	タ	須恵器
S D 305	タ	0.8	0.15	0.05	タ	土師器
S D 306	Ⅶ-14-9B-C	9.0	0.75~1.00	0.2	タ	土師器・須恵器(40)
S D 307	タ	1.5	0.20~0.35	0.05	2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト	
S D 308	タ	8.7	0.30~0.45	0.06	10YR6/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器
S D 309	Ⅶ-14-9-10B, 9C	2.2	0.35~0.45	0.09	タ	土師器・須恵器
S D 310	タ	8.0	0.30~0.54	0.08	タ	土師器・須恵器
S D 311	Ⅶ-14-9B-C	3.0	0.35~0.55	0.05	2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト	土師器・須恵器
S D 312	Ⅶ-14-9B	0.9	0.35~0.40	0.07	10YR6/1褐色灰色砂質シルト	
S D 313	タ	5.3	0.25~0.40	0.06	2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト	
S D 314	タ	1.6	0.25~0.35	0.10	10YR6/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器
S D 315	Ⅶ-14-9B, 10A-B	3.4	0.20~0.35	0.10	タ	
S D 316	Ⅶ-14-10A	4.1	0.20~0.30	0.06	タ	
S D 317	タ	1.5	0.15~0.20	0.03	タ	
S D 318	タ	6.4	0.45~0.60	0.12	タ	土師器・須恵器
S D 319	Ⅶ-14-10A-B, 19-1B	11.1	0.30~0.55	0.06	タ	須恵器
S D 320	Ⅶ-14-10A	5.7	0.35~0.60	0.09	タ	土師器・須恵器・瓦
S D 321	Ⅶ-14-10B	1.2	0.25	0.08	タ	
S D 322	Ⅶ-14-10A-B, 19-1A	14.0	0.40	0.10	タ	土師器・須恵器
S D 323	Ⅶ-14-10B	5.1	0.35~0.45	0.06	タ	土師器・須恵器
S D 324	Ⅶ-14-10A, 19-1A-B	10.2	0.25~0.40	0.11	タ	土師器・須恵器
S D 325	Ⅶ-14-10A, 18-1J, 19-1A	5.7	0.35~0.65	0.16	タ	土師器・須恵器 (37-38)
S D 326	Ⅶ-19-1A	7.0	0.25~0.75	0.09	上層:10YR6/1褐色灰色砂質シルト 下層:2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト	土師器・須恵器
S D 327	Ⅶ-14-10A, 19-1A	9.0	0.25~0.40	0.12	10YR6/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器(39)
S D 328	Ⅶ-19-1A	1.8	0.25	0.03	タ	土師器・須恵器
S D 329	タ	6.8	0.25~0.75	0.09	タ	須恵器
S D 330	タ	1.0	0.2~0.4	0.04	タ	
S D 331	タ	4.5	0.3	0.07	タ	土師器
S D 332	Ⅶ-18-1J Ⅶ-19-1B	14.7	2.0	0.07	タ	

溝(S D)

総数で32条(S D 301~S D 332)を検出した。やや規模の大きいS D 301・S D 306・S D 332を除けば幅0.2~0.8m、深さ0.05~0.18m程度の小溝が大半である。これらの溝を構築方向で区別すれば、北東~南西方向に伸びるもの(S D 303・S D 307~S D 310・S D 314・S D 315・S D 317・S D 318・S D 322・S D 325・S D 331)、南北方向に伸びるもの(S D 316・S D 326・S D 327)、北西~南東方向に伸びるもの(S D 302・S D 305・S D 311~S D 313・S D 319・S D 321・S D 328~S D 330)、東西方向に伸びるもの(S D 304・S D 320・S D 323・S D 324)に区別される。これらの小溝の性格としては、出土遺物が多いS D 306を除けば、耕作に伴う溝である可能性が高い。そのうち、出土遺物から時期が推定できるものは、S D 306が奈良時代前期、S D 320・S D 323・S D 328が平安時代後期に比定される。なお、S D 301以外の各溝の法量・埋土・出土遺物については第2表で示した。

S D 301(第25図、図版九・一〇)

2調査区北西部のⅦ-14-8 A・B区、Ⅶ-14-9 A地区で検出した。一部、S D 302に切られている。北東~南西方向に伸びるもので、検出長7.7m、幅1.4~3.0mを測る。埋土は皿状を呈する断面形状に沿って、上層の2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトと下層の2.5GY8/1灰白色極細粒砂の2層が堆積している。遺物は上層を中心に古墳時代中期に比定される土器が出土しており、南西部で土師器壺・高杯等からなる土器集積を検出した。出土遺物のうち9点(28~36)を図化した。28は土師器広口壺の小破片である。復元口径13.5cmを測る。29~31は土師器直口壺で、3点ともに完形に復元が可能である。球形の体部に口縁部が斜上方に伸

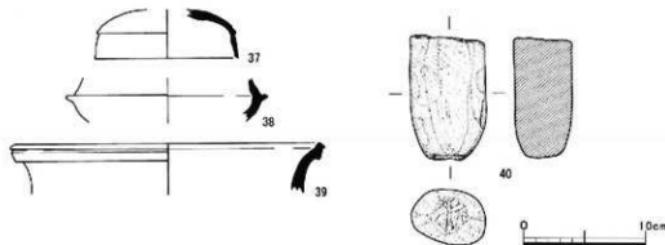
写真2 2調査区 S D 301土器集積検出状況
(南東から)

第25図 S D 301出土遺物実測図

びる29・30と扁球形の体部から口縁部が斜上方に開き気味に伸びる31がある。器面外面の調整は29・31の底部付近に板ナデおよびケズリを施す以外は、ナデにより平滑にされている。法量は29が口径11.4cm、器高19.5cm、体部最大径13.8cm、30が口径10.9cm、器高14.5cm、体部最大径14.6cm、31が口径13.5cm、器高16.1cm、体部最大径16.5cmを測る。色調は29・30が淡黄褐色、31が赤褐色～褐色である。胎土には3mm以下の長石が散見される。土師器高杯は4点(32～35)を図化した。いずれも図上で完形に復元できる。4点共に有稜高杯であるが、稜が明瞭なものは32・33で34・35は稜部分に丸みを持つ。脚部は屈折して聞く小形のもので、34にはスカシ孔が1個穿たれている。器面調整では、杯体部外面にヘラケズリを行う34、杯部外面にハケを多用する35がある。色調は32・33・35が赤褐色、34が白灰色である。胎土中に2mm以下の長石・チャートが散見される。36は須恵器小形鉢の破片である。復元口径8.5cmを測る。体部に波状文が施文されている。外面に灰かぶりが認められる。田辺編年のTK216型式(5世紀前半)に比定される。出土遺物の帰属時期としては、古墳時代前期後半(4世紀後半)～中期前半(5世紀前半)に比定される。

2 調査区 第3面溝出土遺物 (第26図、図版一〇)

S D 306(40)、S D 325(37・38)、S D 327(39)出土の4点を図化した。37は須恵器杯蓋の小破片である。復元口径11.8cmを測る。外面に灰かぶりが認められる。色調は淡青灰色。田辺編年のTK208型式(5世紀中葉)前後のものか。38は須恵器杯身の小破片である。受部が斜上方に短く伸びるものである。焼成がやや不良で、色調は灰白色を呈する。田辺編年のMT15型式(6世紀前半)に比定される。39は須恵器壺の小破片である。口縁部は垂下擴張するもので、端部は外傾し幅広の面を形成している。口縁部外面に黒色釉が施釉されている。田辺編年のMT15型式(6世紀前半)に比定される。40は敲石である。片端部を欠く。残存部分で長さ10.3cm、幅6.2cm、重量510gを測る。端面は敲打により潰れ、凹凸面を形成している。石材は和泉砂岩である。



第26図 2調査区 第3面溝出土遺物実測図

小穴(S P)

小穴は2個(S P 301・S P 302)検出した。2個ともに小溝付近で検出されており、小溝と同様、生産域に関連した造構の可能性がある。法量・埋土等については、第5表で示した。

第5表 2調査区 第3面小穴(S P)法量表(単位m)

造構名	地 区	平面形	長径	短径	深さ	埋 土	出土遺物
S P 301	VII-14-9C	円形	0.53以上	0.18以上	0.06	10YR6/1褐色砂質シルト	
S P 302	VII-14-10A	円形	0.41	0.33	0.09	タ	

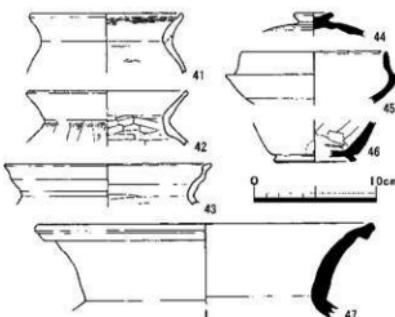
遺構に伴わない出土遺物

2 調査区 第4層出土遺物 (第27図、図版二)

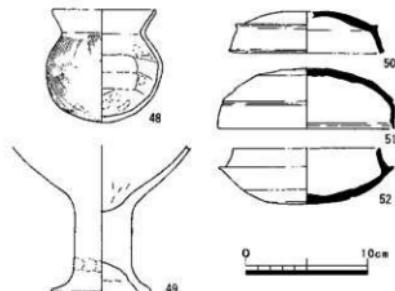
第4層出土の7点(41~47)を図化した。古墳時代中期~奈良時代の遺物が含まれている。41~43は土師器壺の小破片である。口縁部の形状は「く」の字に外反する41、「く」の字に屈曲する屈曲部内面に幅広の面を有する42、受口状口縁を有する43がある。44は須恵器有蓋高杯蓋の小破片である。つまみ部分は上部が窪み形態で、つまみ下幅2.4cm、つまみ上幅3.2cm、つまみ高0.8cmを測る。帰属時期は5世紀後半。45は須恵器杯身の小破片である。色調は淡灰青色。田辺編年のTK10型式(6世紀中葉)に比定される。46は高台を有する壺の小破片である。8世紀代に比定される。47は須恵器壺の小破片である。口縁部は垂下し、外傾する端面を形成している。口縁部外面に黒色釉が施釉されている。田辺編年のMT15型式(6世紀前半)に比定される。

2 調査区 第5層出土遺物 (第28図、図版二)

第5層出土の5点(48~52)を図化した。48は土師器小形壺で、図上で完形に復元が可能である。球形の体部を持つもので、体部最大径が口径を凌駕している。口径8.4cm、器高9.4cm、体部最大径9.5cmを測る。体部外面の器面調整はハケを多用している。5世紀代のものが。49は弥生土器高杯である。鉢状の杯部を持つもので、口縁部を欠く。脚部は中実で、直線的に伸びる柱状部から裾部が小さく開く。脚部法量は脚部高7.1cm、裾部径4.7cmを測る。色調は褐色。生駒西薙産。弥生時代後期前半に比定される。50~52は須恵器である。50は杯蓋および有蓋高杯蓋と推定される。1/2が残存している。口径12.0cm、器高3.5cm、稜径11.7cmを測る。低い天井部から稜が大きく張り出るもので、口縁部は下外方に直線的に伸び、端部に水平な面を持つ。色調は淡灰青色~灰紫色。外面全体に灰かぶりが認められる。田辺編年のTK73型式(5世紀前半)に比定される。51は杯蓋である。3/4以上が残存している。高く丸みのある天井部を持つもので、稜は鈍く口縁部は垂直方向に伸び、口縁端部内面に段を形成する。口径14.4cm、器高5.0cm、稜径14.0cmを測る。色調は淡灰色。田辺編年のTK10型式(6世紀中葉)に比定される。52は須恵器杯身で完形品である。口径12.0cm、器高4.6cm、受部径14.4cmを測る。深く丸みを持つ底体部から、受部は斜上方に短く伸びる。色調は灰白色。底体部外面に灰かぶりが認められる。田辺編年のTK10型式(6世紀中葉)に比定される。



第27図 2調査区 第4層出土遺物実測図



第28図 2調査区 第5層出土遺物実測図

第3章　まとめ

今回の久宝寺遺跡第30次調査は、約700m離れた2箇所の調査区で実施したので、1調査区と2調査区に分けて調査成果を概観し、周辺の既往調査の成果を踏まえて若干の知見を述べてゆく。

・30-1 調査区

1調査区では、古墳時代後期の土坑と溝を検出した。同時期の遺構は北側に隣接する第23次調査1調査区では、溝が検出されており、建築部材と見られる木製品・須恵器が出土している。この須恵器は、土坑埋土から出土した須恵器と同じ6世紀前半のものである。調査面積が狭く、住居跡といった直接的に居住域に伴う遺構は検出されていないが、1調査区周辺に当該時期の居住域があったと考えられる。また、1調査区の南側約100mの府センターによる竜華東西線に伴う調査区(7区)では、6世紀中葉の須恵器を主体とする遺物の集積が検出され、6世紀後半の遺物を伴う堅穴住居が検出されている。これらのことから、1調査区から南側にかけて古墳時代後期(6世紀代)の居住域があったと考えられる。

1調査区の南西側約250m地点を中心とする、第25次2・3調査区、第36次1調査区、第37次1調査区では、古墳時代後期の水田が検出されており、1調査区から南側にかけての居住域に伴う生産域であったと考えられる。

・30-2 調査区

2調査区では、3面で遺構・遺物の検出を行った。その結果、古墳時代中期～近代に至る遺構・遺物を検出した。

第1面では、島畠2基と島畠を囲む水田1筆、これに伴う農耕用井戸・唐鋤溝・小穴など生産に関わる遺構を検出した。2調査区周辺で実施された第23次調査や第24次調査においても、近世初頭以降は生産域としての土地利用が行われており、中河内地域で特有の「半田」と呼ばれる田畠混在の耕地面形が付近一帯に展開していたようである。これらの生産域に見られる田畠混在の耕地面形は、「久宝寺木綿」に代表される綿花栽培に対応したもので、島畠部分で綿を栽培し、水田部分で稻の一毛作が行われたようである。

第2面では、中世末期～近世初頭に比定される土坑・溝を検出した。小溝については、島畠101構築以降の唐鋤溝で、規模の大きいSD204・SD212については、島畠101構築土坑等も検出しているが、各遺構からの出土遺物は小片が大半で量的にも少ないとから、第1面と同様に生産域に関連した遺構群と考えられる。なお、現況の地図上から推定される渋川郡条里の復元においては、調査区付近を境として南北軸の角度が異なることが確認できる。渋川郡全域の条里区画(以下、条里区画Aと呼称)では、南北軸は座標北より5°程度西に振っているが、調査区付近から北側で確認された条里区画(以下、条里区画Bと呼称)では南北軸が座標北から30°程度東に振って区画されていることが判る。既往の調査においては、条里区画Bに規制された土地利用が奈良時代に遡ることが確認されており、第2面で検出した中世末期に比定されるSD204、近世初頭に比定されるSD212も、条里区画Bに沿って構築されている。SD204については、条里区

画Bの最南端の里境に対応する可能性が高い。これらのことは、同じ渋川郡内において部分的に異なる基準軸に沿った条里区割による土地利用がなされていたことを可視的に示している。

第3面では古墳時代中期～平安時代後期に比定される土坑・溝を検出した。古墳時代中期・後期に比定できる小溝については、殆どが耕作に伴う溝と推測され、当該時期においては概ね生産域としての土地利用が窺われる。ただし、SD301のように土器集積を伴い、小溝より規模が大きいものや、SK301のように土師器甕を倒位に埋置しているものも見られ、2調査区周辺の当該時期の様相を明らかにするためには、周辺における調査に伴う資料の増加を待ち、検討する必要があろう。

註記

- 註1 第23次調査の調査成果については、本書掲載。
- 註2 西村歩・奥村茂輝・辻本裕也 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査—」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第118集』(財)大阪府文化財センター
- 註3 坪田真一・原田昌則 2006「I 久宝寺遺跡第25次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
原田昌則・坪田真一 2004「II 久宝寺遺跡第36次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
原田昌則・金親満夫他 2004「III 久宝寺遺跡第37次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会

参考文献

- ・田辺昭三 1966『附邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ
- ・森島康雄 1990『中河内の羽釜』『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
- ・小笠原好彦 1975「土馬考」『物質文化 考古学民俗学研究』物質文化研究会
- ・藤井直正他 1975「若江寺跡・若江城跡」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15』東大阪市遺跡保護調査会
- ・佐藤 隆 1992「第2節 平安時代における長原遺跡の動向 ii)長原遺跡における平安時代の土器耀年」『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』(財)大阪市文化財協会
- ・原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に伴う—」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2005「II 久宝寺遺跡第48次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会

図版一（1調査区）



1調査区から西方を望む(東から)



1調査区 西部検出状況(北から)

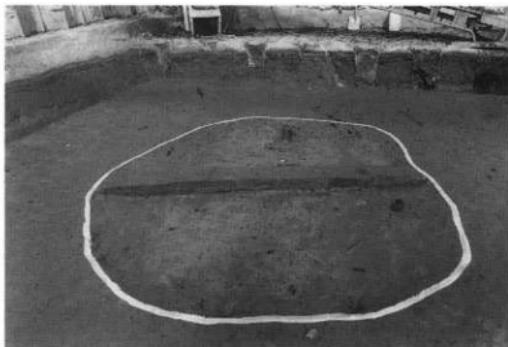


1調査区 西壁地層断面(北から)

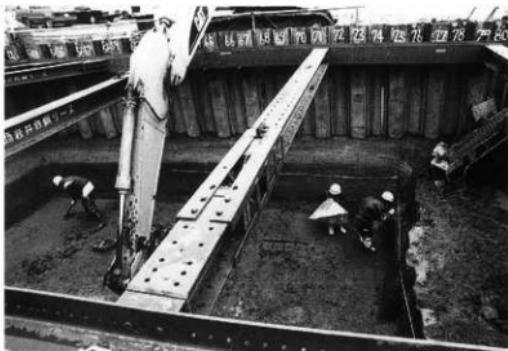
図版二（1調査区）



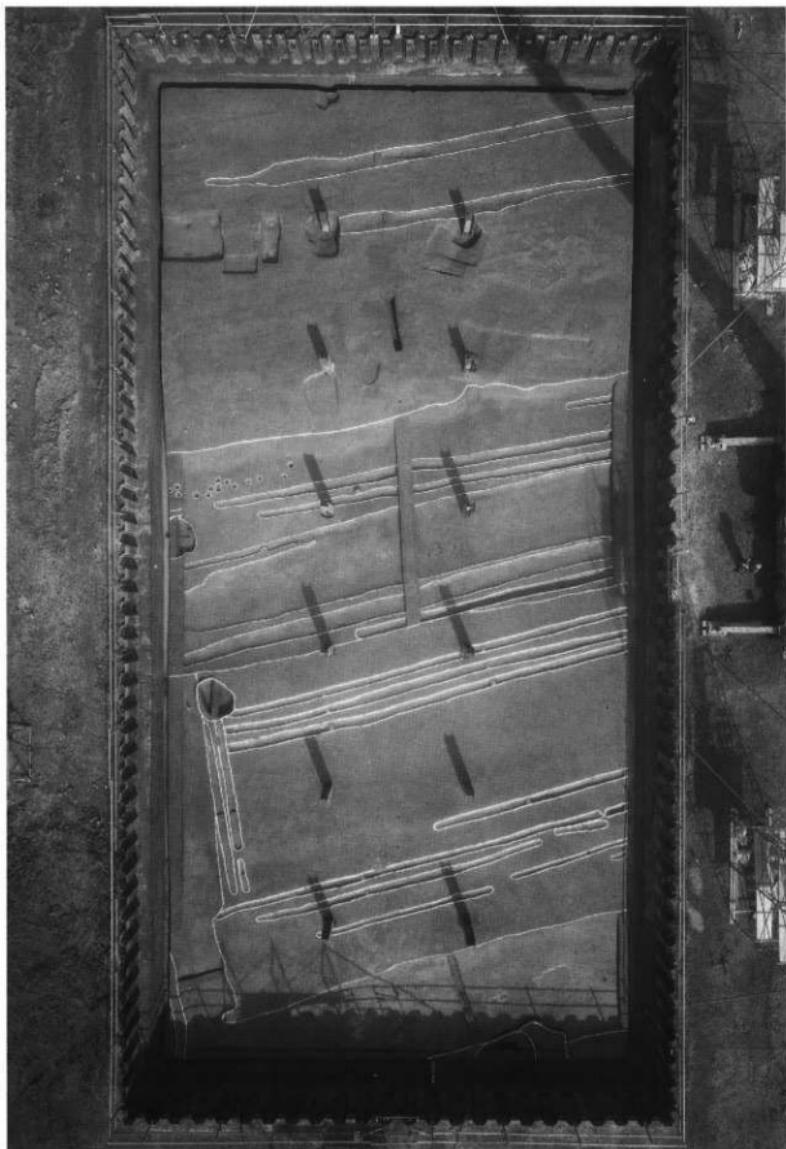
1調査区 東部検出状況(北から)



1調査区 SK 101検出状況(南から)

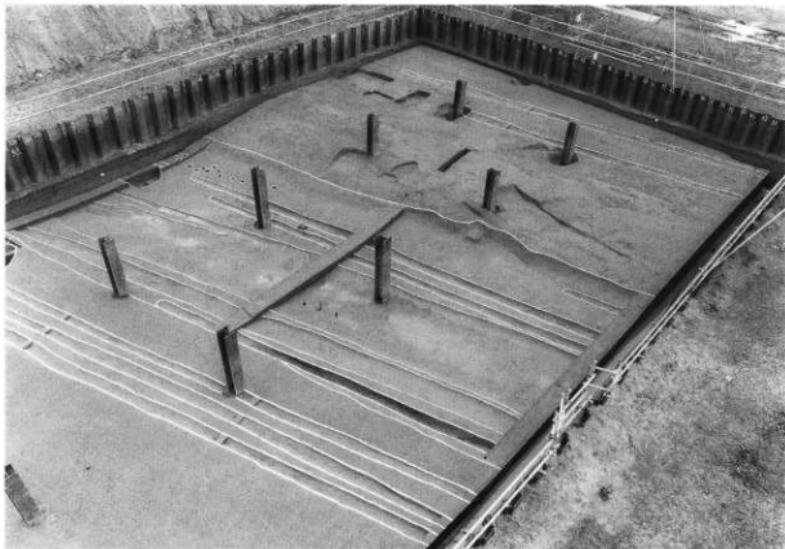


1調査区 調査風景(東から)

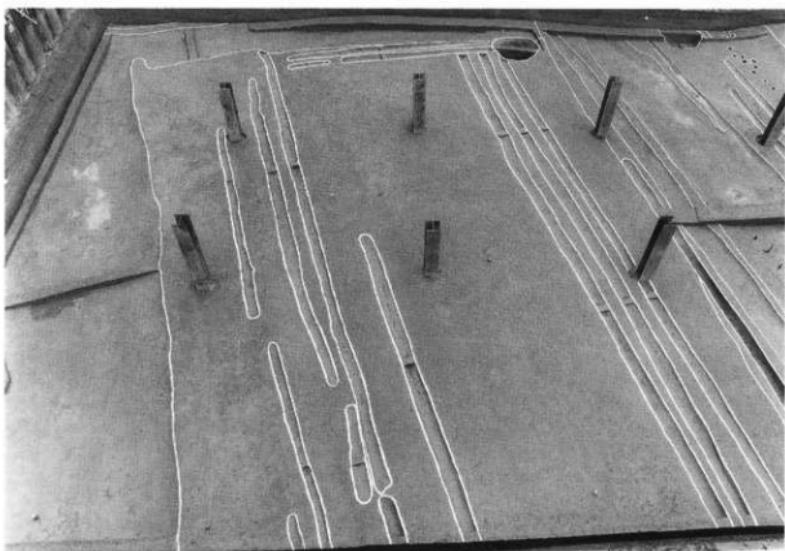


2 調査区 第1面(上が北)

図版四 (2調査区)



2調査区 第1面 北部遺構検出状況(南東から)



2調査区 第1面 南部遺構検出状況(東から)

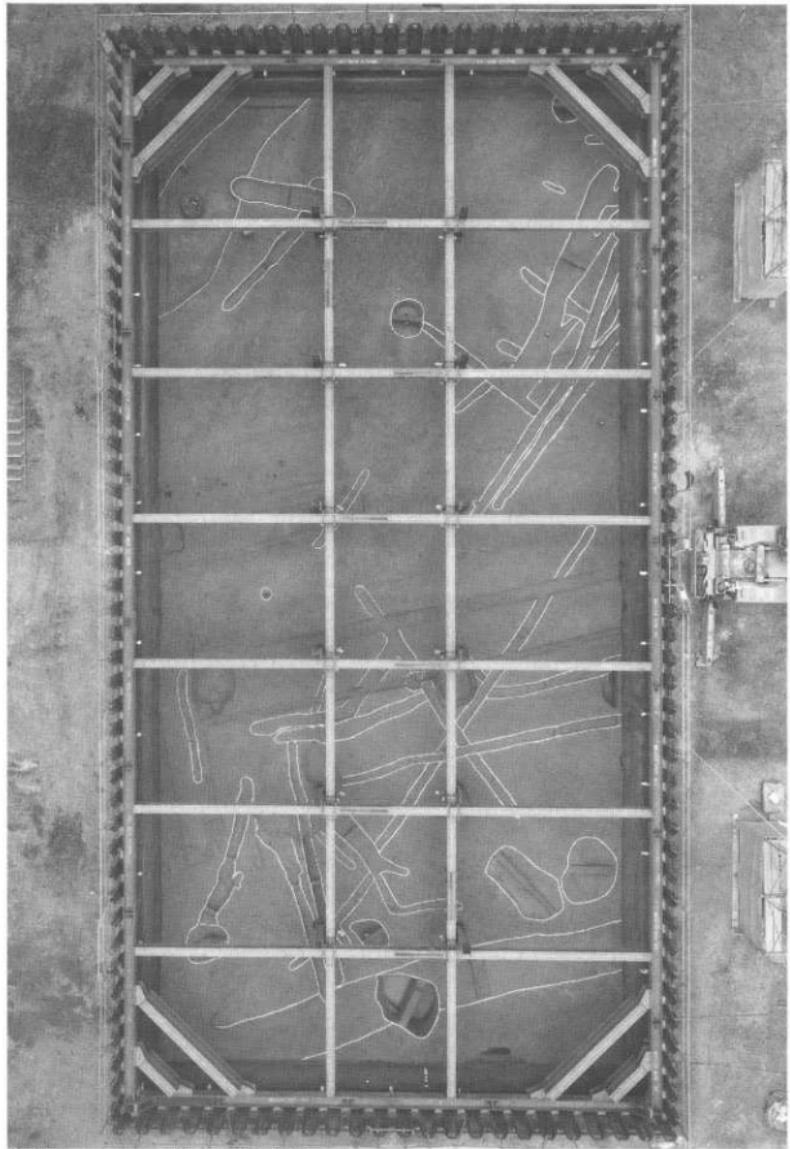


2調査区 S E 102検出状況(東から)



2調査区 第2面 遺構検出状況(南から)

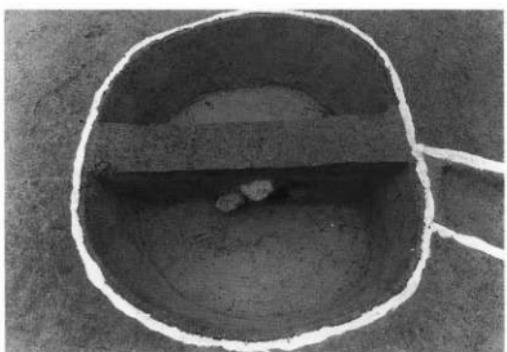
図版六 (2) 調査区



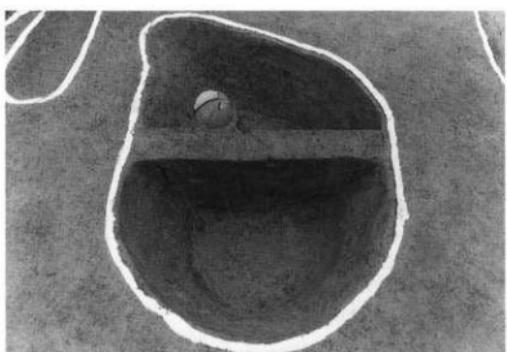
2 調査区 第3面 遺構検出状況(上が北)



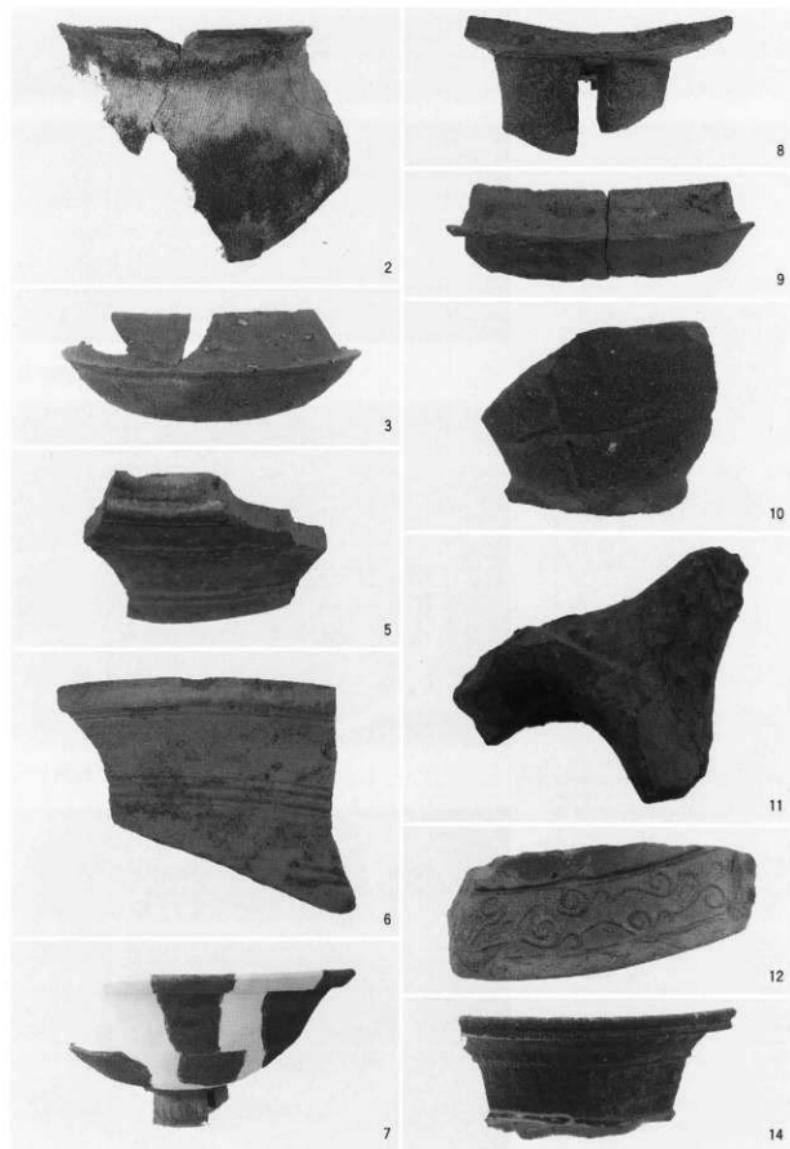
2調査区 SK 301検出状況(南から)



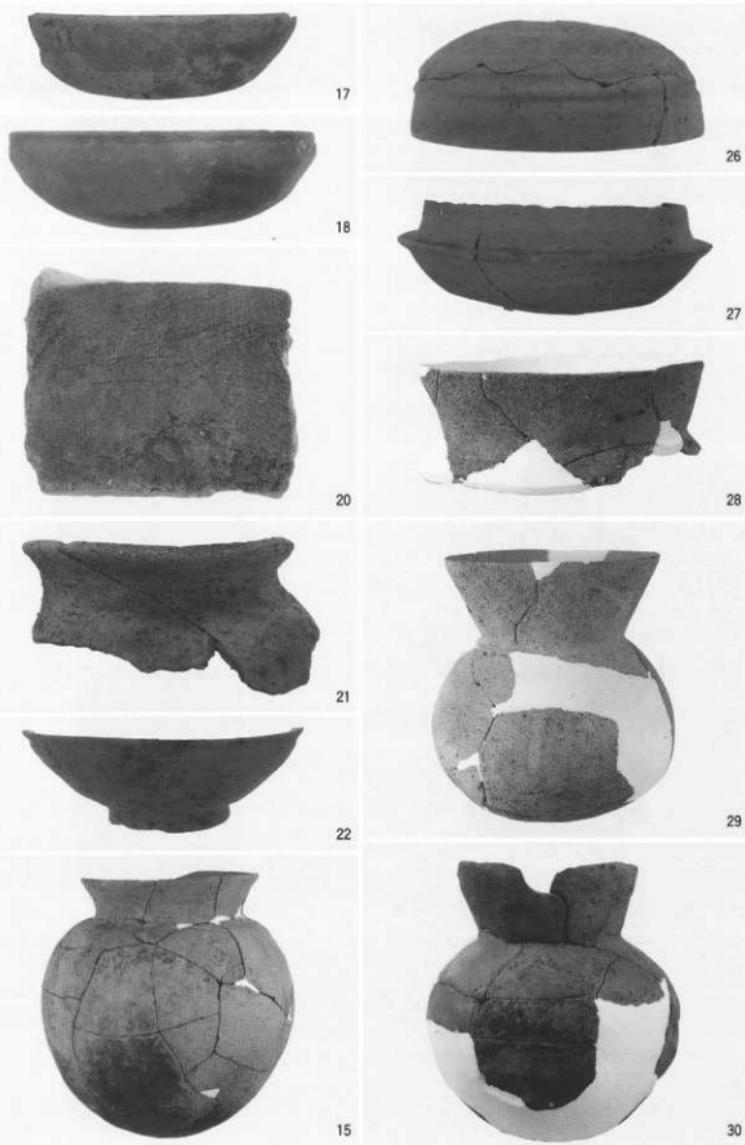
2調査区 SK 302検出状況(南から)



2調査区 SK 305検出状況(南から)



1 調査区 SK101(2・3)、2 調査区畦畔101盛土内(5~11)、SD105(12)、SK202(14) 出土遺物



2 調査区 SK 301(15)、SK 302(17・18・20)、SK 304(21・22)、SK 305(26・27)、SD 301(28~30)
出土遺物



31



35



32



36



33



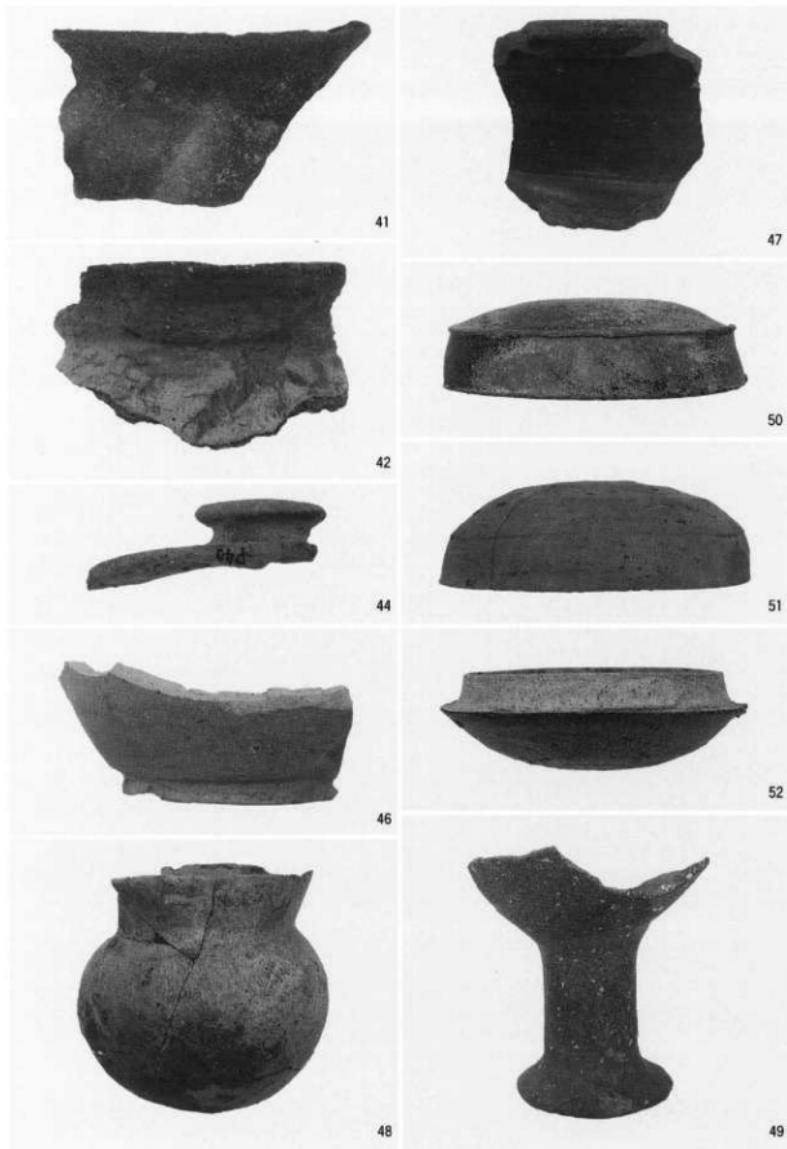
34



40



2 調査区 S D 301(31~36)、S D 306(40) 出土遺物



2 調査区 第4層(41・42・44・46・47)、第5層(48・49・50~52) 出土遺物

III 久宝寺遺跡第39次調査(KH2001-39)・
第51次調査(KH2003-51)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字龜井他(平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い、現住所では龍華町2丁目)で計画された大阪竜華都市拠点地区内で、平成13年度、平成15年度に実施した大阪竜華都市拠点地区雨水貯留施設送排水管築造工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第39次調査(KH2001-39)、第51次調査(KH2003-51)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が都市基盤整備公団関西支社(現 独立行政法人都市再生機構西日本支社)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は第39次調査が平成14年1月22日～平成14年9月30日にかけて原田昌則・成海佳子・樋口めぐみ・二宮(旧姓金親)満夫(現 宮崎県教育委員会)、第51次が平成15年6月10日～平成15年7月31日にかけて二宮が担当した。調査面積は第39次調査が668.11m²、第51次調査が76.8m²である。現地調査においては、第39次調査－伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・北原清子・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・村井俊子・村田知子・山内千恵子・吉川一栄・若林久美子、第51次調査－垣内・加藤・村井・村田・吉川が参加した。
1. 整理業務は、平成15年12月1日～平成18年2月28日に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物尖洞－伊藤・岩沢・加藤・北原・竹田・田島・永井・中村・村井・村田・吉川一栄・若林久美子、図面トレー－ス－山内・図面レイアウト－原田・遺物写真－垣内が行った。
1. 本書の執筆・編集は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして原田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力を受けた。
独立行政法人都市再生機構西日本支社、大旺建設(株)
1. 基準点測量は下記の機関に委託した。
(株)ジェクト
1. 出土鉄器の保存処理については下記の諸機関に委託した。
パリノ・サーヴェイ(株)
1. 本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内式－古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式－古相～新相)に区別した。当該期の土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(原田1993)に従った。
1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、357頁に提示した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	309
第2章 調査概要	310
第1節 調査の方法と経過	310
第2節 基本層序	312
第3節 検出遺構と出土遺物	320
1) 各調査区の概要	320
2) 遺構に伴わない遺物	352
第3章 まとめ	358

挿図目次

第1図 調査地周辺図	309
第2図 調査区設定図	311
第3図 1～3区 北壁断面図	313-314
第4図 3・4区 東壁断面図	315-316
第5図 5・6区 東壁、7区 北壁断面図	317-318
第6図 1・2・7区 第1～4・5・7面検出遺構平面図	321-322
第7図 3・4区 第1～3面検出遺構平面図	323-324
第8図 3・4区 第4～6面検出遺構平面図	325-326
第9図 5・6区 第1・2・4・5面検出遺構平面図	327
第10図 5・6区 第6～9面検出遺構平面図	328
第11図 5・6区 第10面検出遺構平面図	329
第12図 S K101、S K102、S K104出土遺物実測図	329
第13図 1区 第1面平面図	330
第14図 S K104平断面図	330
第15図 S D107断面図	332
第16図 S D107出土遺物実測図	334
第17図 S D123出土遺物実測図	334
第18図 S K201出土遺物実測図	335
第19図 S K202出土遺物実測図	335
第20図 S K202平断面図	336
第21図 S D201出土遺物実測図	337
第22図 N R201出土遺物実測図	339
第23図 堤301平断面図	341
第24図 護岸施設301出土遺物実測図	342

第25図	墳302平断面図	343
第26図	S D410鉄剣出土地点平断面図	345
第27図	S D410出土鉄剣実測図	346
第28図	N R401出土遺物実測図	347
第29図	第7層出土遺物実測図-1	353
第30図	第7層出土遺物実測図-2	354
第31図	第7層出土遺物実測図-3	355
第32図	第15層出土遺物実測図	356
第33図	古墳時代前期(布留式期)~中期の自然河川変遷推定図	360

写 真 目 次

写真1	N R201北壁検出の地震痕跡	339
-----	-----------------	-----

表 目 次

第1表	調査区一覧表	312
第2表	2区 第1面溝法量表	332-333
第3表	3区 第1面溝法量表	333
第4表	6区 第2面溝法量表	338
第5表	2・3区 第2面小穴法量表	338

挿 図 目 次

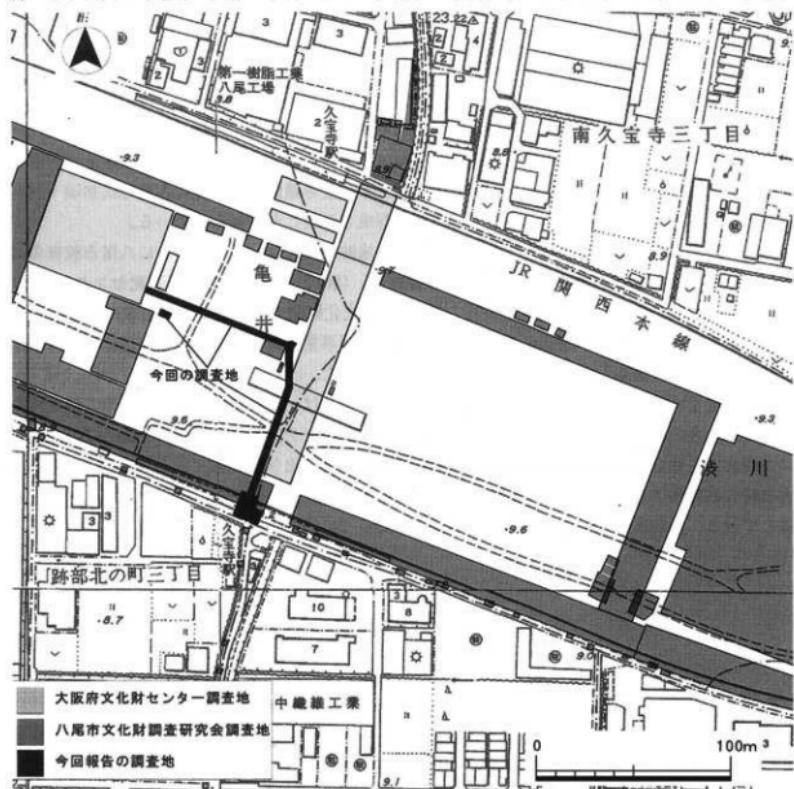
図版一	調査前の状況	図版一四	5区 全景
	調査風景		6区 全景
図版二	1区 全景	図版一五	5区 S D410鉄剣出土状況
	2区 全景		同上 鉄剣出土状況
図版三	2区 遺構検出状況	図版一六	4区 遺構検出状況
	3区 遺構検出状況		4区 遺構検出状況
図版四	5区 全景	図版一七	6区 S D509検出状況
	6区 全景		7区 N R501検出状況
図版五	1区 S D201検出状況	図版一八	3区 S D601検出状況
	1区 S K201検出状況		6区 全景

図版六	2区 全景 2区 S D204・S D205検出状況	図版一九	5区 N R702検出状況 5区 全景
図版七	3区 S D206・S P208検出状況 5区 S K202検出状況	図版二〇	6区 S D801検出状況 6区 全景
図版八	2区 堀301検出状況 同 上 検出状況	図版二一	6区 全景 6区 S D903検出状況
図版九	2区 堀301細部 同 上 断ち割り	図版二二	5区 N R1001検出状況 6区 N R1002検出状況
図版一〇	3区 護岸施設301検出状況 同 上 検出状況	図版二三	S D107、S K201、S K202、 S D201、N R201、護岸施設301 出土遺物
図版一一	3区 護岸施設301東部 同 上 東部 同 上 中央部から東部	図版二四	S D410、N R401出土遺物
図版一二	1区 S D401検出状況 3区 遺構検出状況	図版二五	第7層出土遺物
図版一三	3区 S D406検出状況 4区 N R401検出状況	図版二六	第7層出土遺物
		図版二七	第7層出土遺物
		図版二八	第7層、第15層出土遺物

第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた三角州上の微高地に位置する縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市西部の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・龍華町・北龜井町・渋川町の東西約1.7km、南北約1.4kmがその範囲とされている。

久宝寺遺跡の発見の契機は、1935年(昭和10年)に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事中に船の残片とともに、弥生時代中期～古墳時代に至る遺物が発見されたことによるが、断片的な資料であり、長らく遺跡の実体は不明であった。昭和40年代後半には、遺跡の西部を南北に縦断す



第1図 調査地周辺図(1/2500)

る近畿自動車道の計画に伴い、1973～1974年(昭和48～49年)に試掘調査が実施された結果、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が重層的に広範囲にわたって検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。これらの試掘結果をもとに、昭和57年以降は(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター)により近畿自動車道建設予定地での発掘調査〔久宝寺北(その1～3)・久宝寺南(その1～3)・亀井北(その1)〕が実施された。

調査の結果、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が多量に検出されている。なかでも、古墳時代初頭の準備造船の発見は、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が津洋的な役割を果たした集落であったことを示す資料として注目される。この調査以降も遺跡内で断続的に発掘調査が行われており、八尾市北亀井町3丁目で行われた第9次調査(KH91-9)では、古墳時代前期(布留式期古相)の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは方墳2基と墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されている。前方後方墳からは、複合口縁壺形と直口壺形の2種類の壺形埴輪が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重である。また、八尾市神武町で行われた第18次調査(KH94-18)では、朝鮮半島の南部に源流を持つ炉形土器・軟質両耳壺が出土しており、隣接する大阪市の加美遺跡で検出された加美1号方形周溝墓出土の朝鮮半島三国時代初頭の陶質土器とともに、渡来系集団の集落が古墳時代初頭に存在したことが明らかになった。この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

今回、久宝寺遺跡第39次調査を実施した竜華操車場跡地内では、昭和63年度に八尾市教育委員会による試掘調査を嚆矢として、八尾市教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター(平成14年4月以降 大阪府文化財センター)、(財)八尾市文化財調査研究会により継続的に発掘調査が実施されており、特に平成9年度以降は八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地地区画整理事業に伴う基盤整備に関連した発掘調査が随所で行われてきた。

今回調査を実施した第39次調査、第51次調査地の周辺では、北側には古墳時代中期の壙が検出された95-8・9トレンチ、96-1トレンチ、97-1トレンチ、第20次調査(KH96-20)、東側には横穴式石室を主部に持つ七ツ門古墳(6世紀中葉)が検出された98-1トレンチ、西側には古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される久宝寺1号墳が検出された多目的広場の調査が隣接しており、第39次調査の南端は第24次調査(KH98-24)の4調査区と一部重複している。

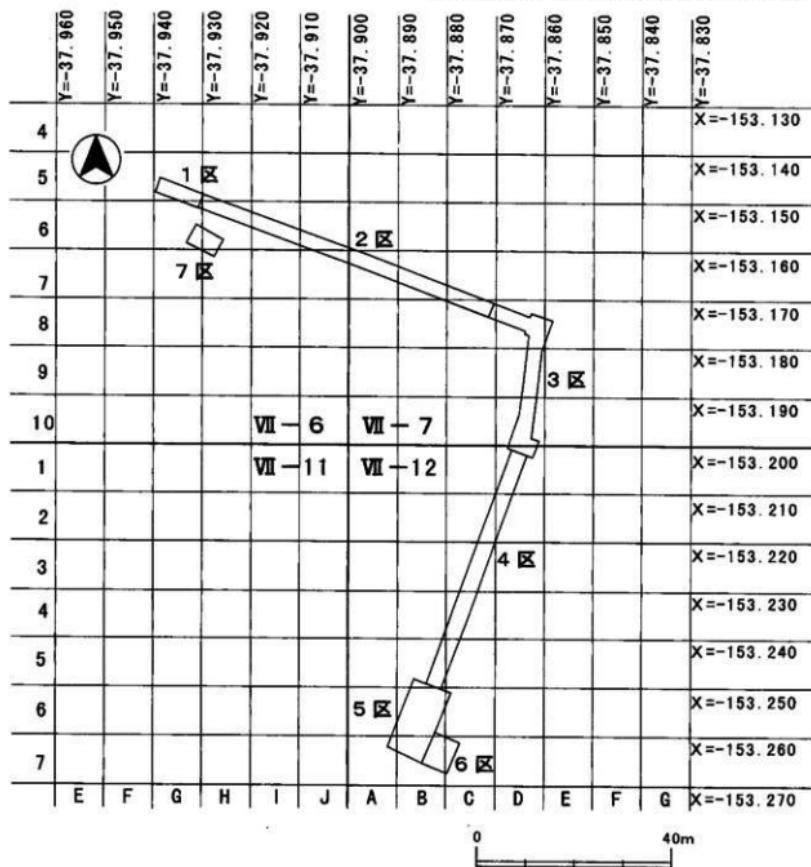
第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、旧国鉄の竜華操車場跡地とその周辺で計画された八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地地区画整理事業に伴うもので、平成9年度以降、基盤整備事業の一環として、道路部分および公共施設を中心とした発掘調査が継続して実施されている。

今回報告する第39次調査・第51次調査は大阪竜華都市拠点地区雨水貯留施設送排水管の布設工事に伴うもので、総調査面積は698.51m²を測る。第39次調査対象地は管布設部分の開削部分と立

III 久宝寺遺跡第39・51次調査(KH2001-39・2003-51)



第2図 調査区設定図(1/1000)

坑部分の人孔部に分かれていたため調査では6箇所(2区～7区)に区別した。第51次調査は、第39次調査の2区から西方の(財)大阪府文化財センターが発掘調査を実施した多目的広場を繋ぐ9.0mで、この部分については1区と呼称した。各調査区の規模等は下記の表にまとめた。

調査に際しては、遺跡範囲確認調査の結果から、現地表下1.5m前後を機械掘削とし、以下3～4mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、縄文時代晚期～近世に至る遺構・遺物を検出した。

地区割については、平成9年度以降継続する調査に対応する為に、竜華操車場跡地全域を含む地域を東西2km、南北1kmについて、国土座標第VII系を基準として設定した大区画・中区画・

小区画を使用した。大区画は500m四方で全体を8区(I~J)に区画し、北西隅の区画をIとし南東隅をJと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区(1~25)に区画し、北西隅の区画を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区画し、地区的呼称については、東西方向はアルファベット(西からA~J)、南北方向は算用数字(北から1~10)で示し、1A区~10J区とした。また地点表示は、中区画北西隅を起点として東西値(X 0~X100)、南北値(Y 0~Y100)で表記した。遺構番号については、報告書作成段階に各調査区の調査面を統一した後、1区から順番に通し番号を付けた。遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、3桁の遺構番号と合わせて表記した。〔凡例SK101〕

第1表 調査区一覧表

地区名	調査区名(略号)	面積(m ²)	調査期間	担当者
1区	第51次調査(KH2003~51)	30.4	平成15年6月10日~平成15年7月31日	金親
2区	第39次調査(KH2001~39)	192.0	平成14年4月19日~平成14年7月9日	原田
3区	第39次調査(KH2001~39)	92.11	平成14年2月19日~平成14年6月5日	原田・成海
4区	第39次調査(KH2001~39)	154.5	平成14年3月18日~平成14年6月5日	成海
5区	第39次調査(KH2001~39)	171.0	平成14年7月1日~平成14年9月26日	樋口
6区	第39次調査(KH2001~39)	32.5	平成14年6月28日~平成14年8月21日	金親
7区	第39次調査(KH2001~39)	26.0	平成14年5月31日~平成14年7月1日	樋口

第2節 基本層序

調査区のうち東西方向に長い1区・2区・3区北部・7区については北壁、南北方向に長い3区~6区については東壁の地層を、層相から39層に分類し、基本層序(第0層~第38層)とした。ただ、3区南部から4区については一部が(財)大阪府文化財センター調査(98-2トレンチ)と重複するため、第14層迄の地層が不明である。

第0層：竜華操車場建設時の盛土。現地表面の標高はT.P.+8.7~9.1m。

第1層：2.5GY8/1灰白色~2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト。マンガン斑が顯著。層厚0.05~0.25m。1~3・5区で検出。

第2層：2.5GY7/1明オリーブ灰色~10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土~砂質シルト。層厚0.05~0.35m。古墳時代中期~中世の遺物を含む。1~3区・5区で検出。1・5・6区では上面が第1面検出面。

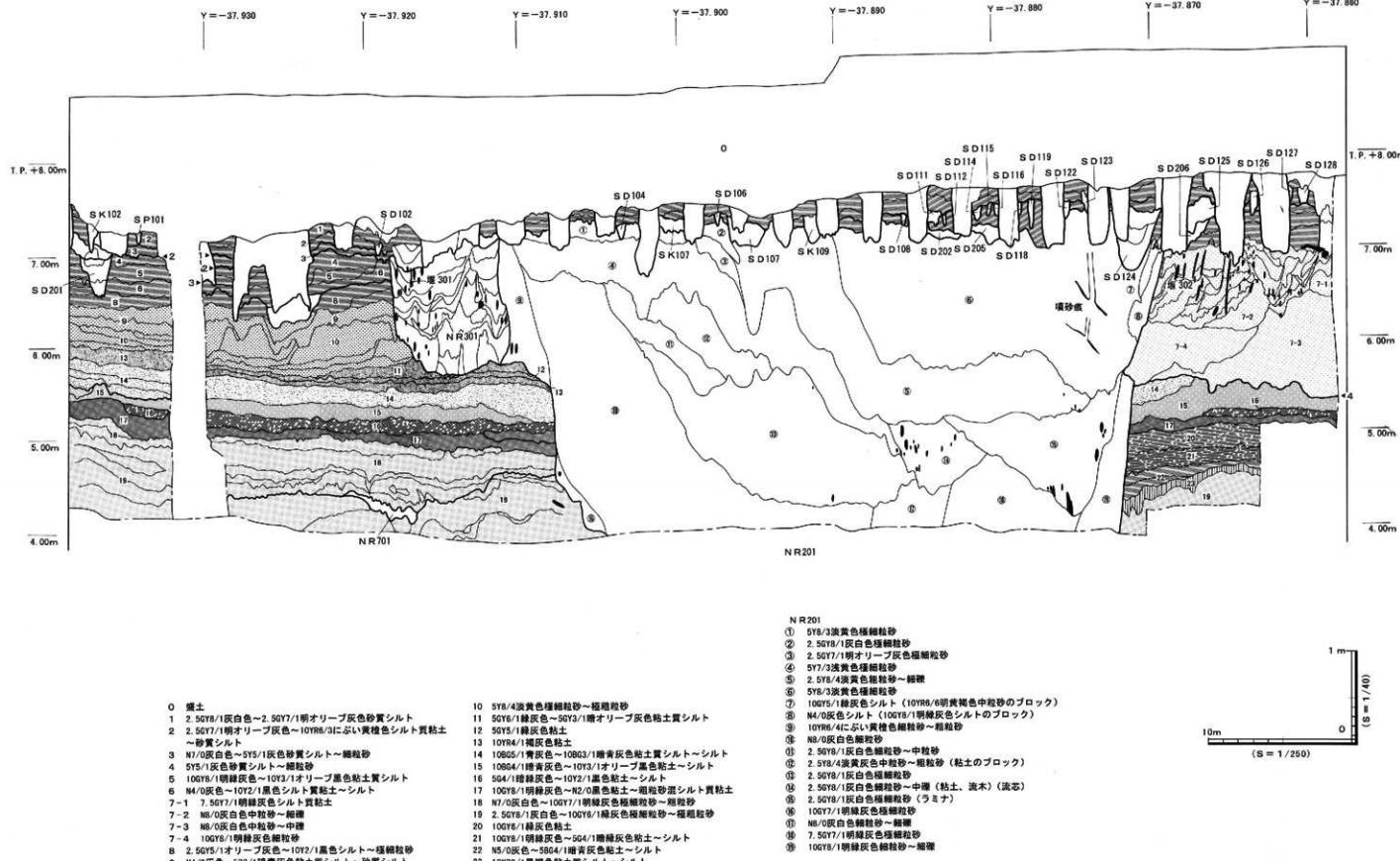
第3層：N7/0灰白色~5Y5/1灰色砂質シルト~細粒砂。マンガン斑が顯著。層厚0.07~0.53m。上面が第1面検出面。1~3区・5区で検出。

第4層：5Y5/1灰色砂質シルト~細粒砂。層厚0.05~0.23m。上面が第2面検出面。1~3区・5区で検出。

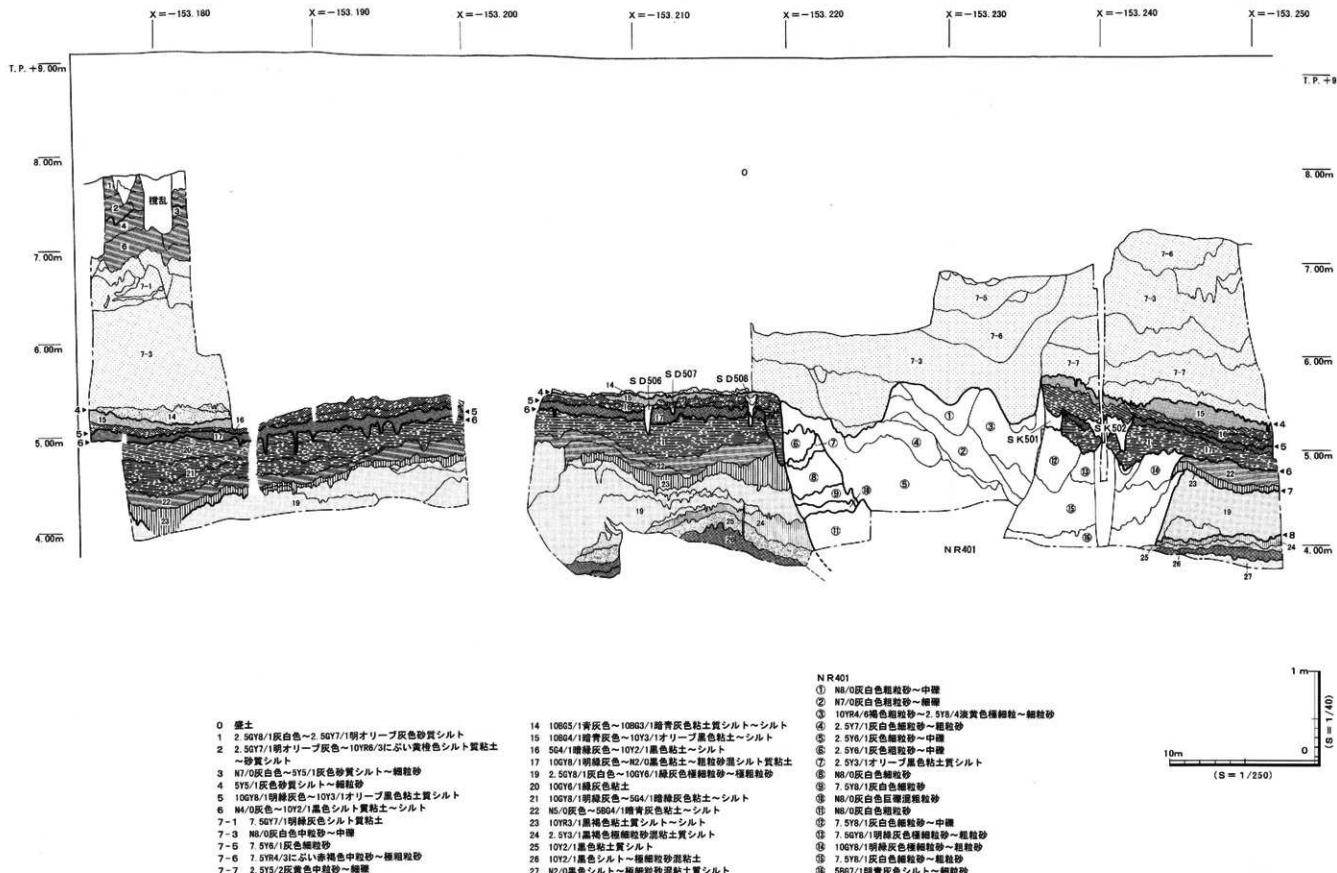
第5層：10GY8/1明緑灰色~10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。層厚0.07~0.23m。1・2区で検出。

第6層：N4/0灰白色~10Y2/1黒色シルト質粘土~シルト。植物遺体のラミナ。層厚0.04~0.38m。上面が第3面で捉えた壙301、N R 301の検出面。1~3区で検出。

第7層：N8/0灰白色~10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂~中疊。河川堆積層。第7~1層~第7~

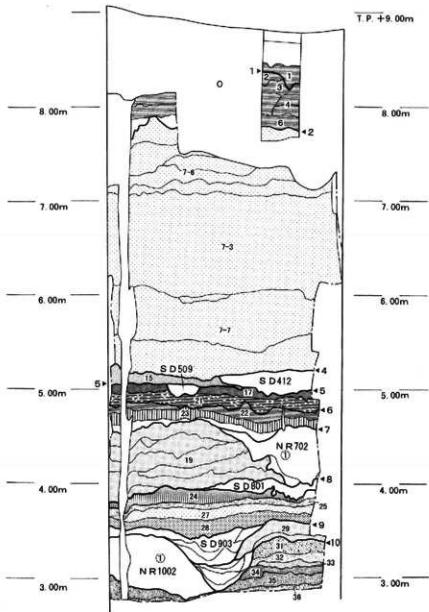
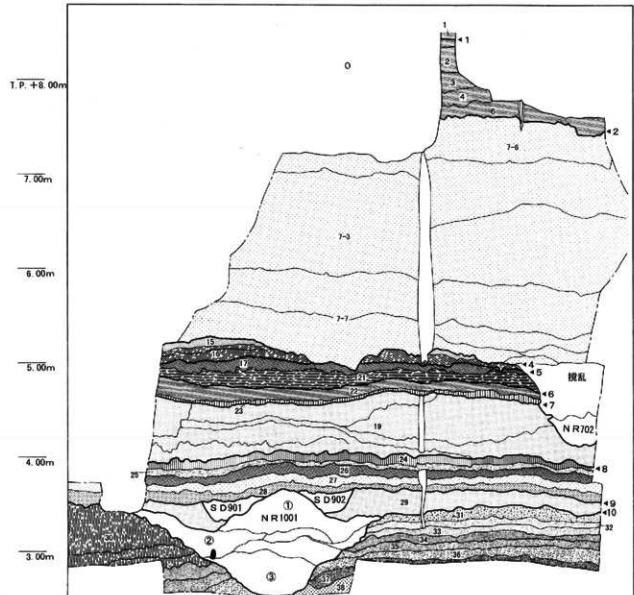


第3図 1~3区北壁断面図



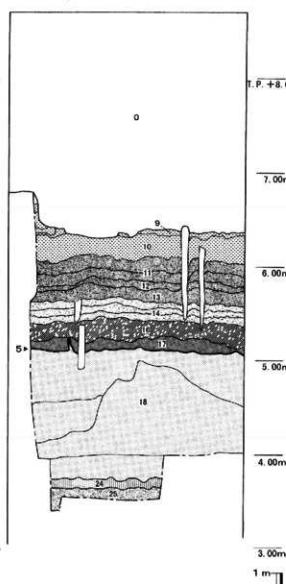
第4図 3・4区東壁断面図

X = -153.255



III 久宝寺遺跡第39・51次調査 (K H2001-39・2003-51)

Y = -37.830



第5図 5・6区東壁、7区西壁断面図

- 7層に分層。層厚1.40~2.50mで南部に行くに従って層厚が漸増している。2~6区で検出。5・6区では第7~6層上面が第2面検出面。2・3区で検出し、第3面の造構とした埴302は第7~2層中に構築されている。
- 第8層：2.5GY5/1オリーブ灰色~10Y2/1黒色シルト~極細粒砂。層厚0.08~0.27m。1・2区で検出。
- 第9層：N4/0灰色~5B3/1暗青灰色粘土質シルト~砂質シルト。層厚0.08~0.32m。1・2・7区で検出。
- 第10層：5Y8/4淡黄色極細粒砂~極粗粒砂。洪水砂層。層厚0.25~0.55m。1・2・7区で検出。
- 第11層：5GY6/1緑灰色~5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。層厚0.04~0.29m。2・7区で検出。
- 第12層：5GY5/1緑灰色粘土。層厚0.02~0.09m。2・7区で検出。
- 第13層：10YR4/1褐色灰色粘土。粘性強い。植物遺体を含む。層厚0.02~0.21m。1・2・7区で検出。
- 第14層：10BG5/1青灰色~10BG3/1暗青灰色粘土質シルト~シルト。層厚0.04~0.41m。1~4区・7区で検出。
- 第15層：10BG4/1暗青灰色~10Y3/1オリーブ黒色粘土~シルト。炭酸鉄を多く含む。層厚0.04~0.43m。1~6区で検出。上面が第4面検出面。
- 第16層：5G/1暗緑灰色~10Y2/1黒色粘土~シルト。層厚0.07~0.24m。1~5区・7区で検出。
- 第17層：10GY8/1明緑灰色~N2/0黒色粘土~粗粒砂混シルト質粘土。土壤化層。層厚0.04~0.27m。1~7区で検出。上面が第5面検出面。
- 第18層：N7/0灰白色~10GY7/1明緑灰色極細粒砂~粗粒砂。河川堆積層。層厚1.35m。1~2・7区で検出。
- 第19層：2.5GY8/1灰白色~10GY6/1緑灰色極細粒砂~極粗粒砂。河川堆積層。層厚1.25m。1~6区で検出。上面が第7面検出面。
- 第20層：10GY6/1緑灰色粘土。層厚0.07~0.28m。2・3区で検出。上面が第6面検出面。
- 第21層：10GY8/1明緑灰色~5G4/1暗緑灰色粘土~シルト。層厚0.07~0.46m。2~6区で検出。
- 第22層：N5/0灰白色~5BG4/1暗青灰色粘土~シルト。層厚0.03~0.32m。2~6区で検出。
- 第23層：10YR3/1黒褐色粘土質シルト~シルト。層厚0.04~0.30m。2~6区で検出。
- 第24層：2.5Y3/1黒褐色極細粒砂混粘土質シルト。植物遺体を含む腐植土層。上面に極細粒砂のラミナ。層厚0.05~0.30m。4~7区で検出。上面が第8面検出面。
- 第25層：10Y2/1黒色粘土質シルト。酸化鉄を含む。上面に植物遺体を含む。層厚0.03~0.17m。4~7区で検出。
- 第26層：10Y2/1黒色シルト~極細粒砂混粘土。層厚0.05~0.28m。4・5区で検出。
- 第27層：N2/0黒色シルト~極細粒砂混粘土質シルト。炭酸鉄を多く含む。層厚0.03~0.15m。4~6区で検出。
- 第28層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト。グライ化層。層厚0.05~0.19m。5・6区で検出。
- 第29層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト。上面が土壤化。層厚0.08~0.30m。5・6区で検出。

上面が第9面検出面。

第30層：2.5Y5/3黄褐色～5Y6/1灰色粘土質シルト～極細粒砂の互層。河川堆積層。層厚0.65m。

5区で検出。

第31層：5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルト～シルト質粘土。層厚0.03～0.17m。5・6区で検出。

上面が第10面検出面。

第32層：5Y3/1オリーブ黒色粘土～シルト。層厚0.03～0.12m。5・6区で検出。

第33層：10GY4/1暗緑灰色粘土～粘土質シルト。グライ化層。層厚0.03～0.11m。5・6区で検出。

第34層：10GY3/1暗緑灰色シルト～シルト質粘土。生物の擾乱が認められる。層厚0.04～0.13m。5・6区で検出。

第35層：7.5Y2/1黒色粘土～粘土質シルト。暗色帶。層厚0.05～0.17m。5・6区で検出。

第36層：10Y3/1オリーブ黒色粘土～粘土質シルト。層厚0.05～0.17m。5・6区で検出。

第37層：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。層厚0.02～0.15m。5区のみで検出。

第38層：7.5GY4/1暗緑灰色シルト～細粒砂。層厚0.06～0.17m。5区のみで検出。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 各調査区の概要

第1面(第6・7・9図、図版二～四)

1～6区で検出した。第2層および第3層上面(T.P.+8.4～7.4m)を構築面としている。検出遺構には、井戸1基(S E101)、土坑11基(S K101～S K111)、溝31条(S D101～S D131)、落ち込み2基(S O101・S O102)がある。時期的には一部、古墳時代中期に遡る遺構を除けば平安時代中期～近代のものがある。

井戸 (S E)

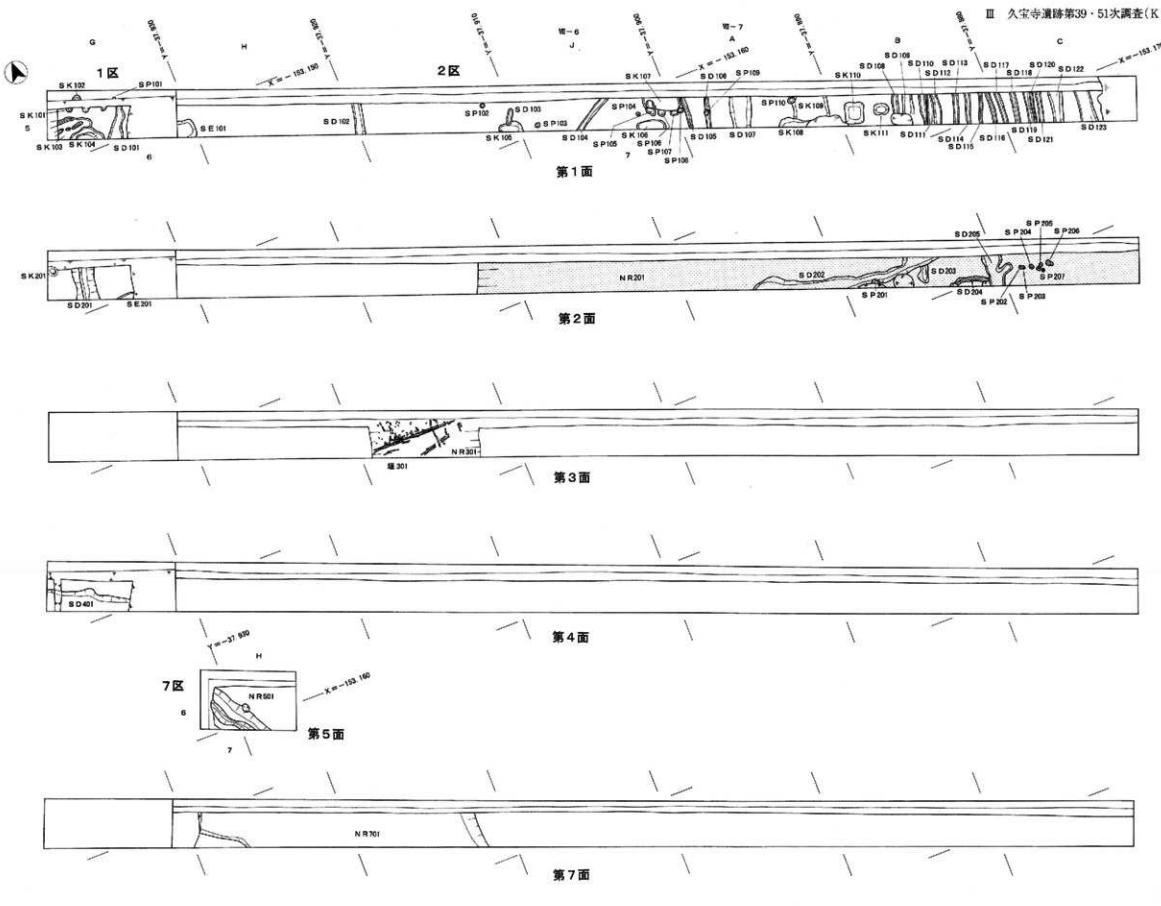
S E101

2区西部のⅦ-6-6G地区で検出した。素堀り井戸で西側が搅乱、南側が調査区外に至る。検出部分で東西幅1.1m、南北幅1.0m、深さ0.45mを測る。埋土は2層で、上層は10YR5/1褐色灰色砂質シルト、下層はグライ化が顕著な10BG6/1青灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。なお、本来の構築面は第1層より上部と考えられる。近世の農耕用の井戸と推定される。

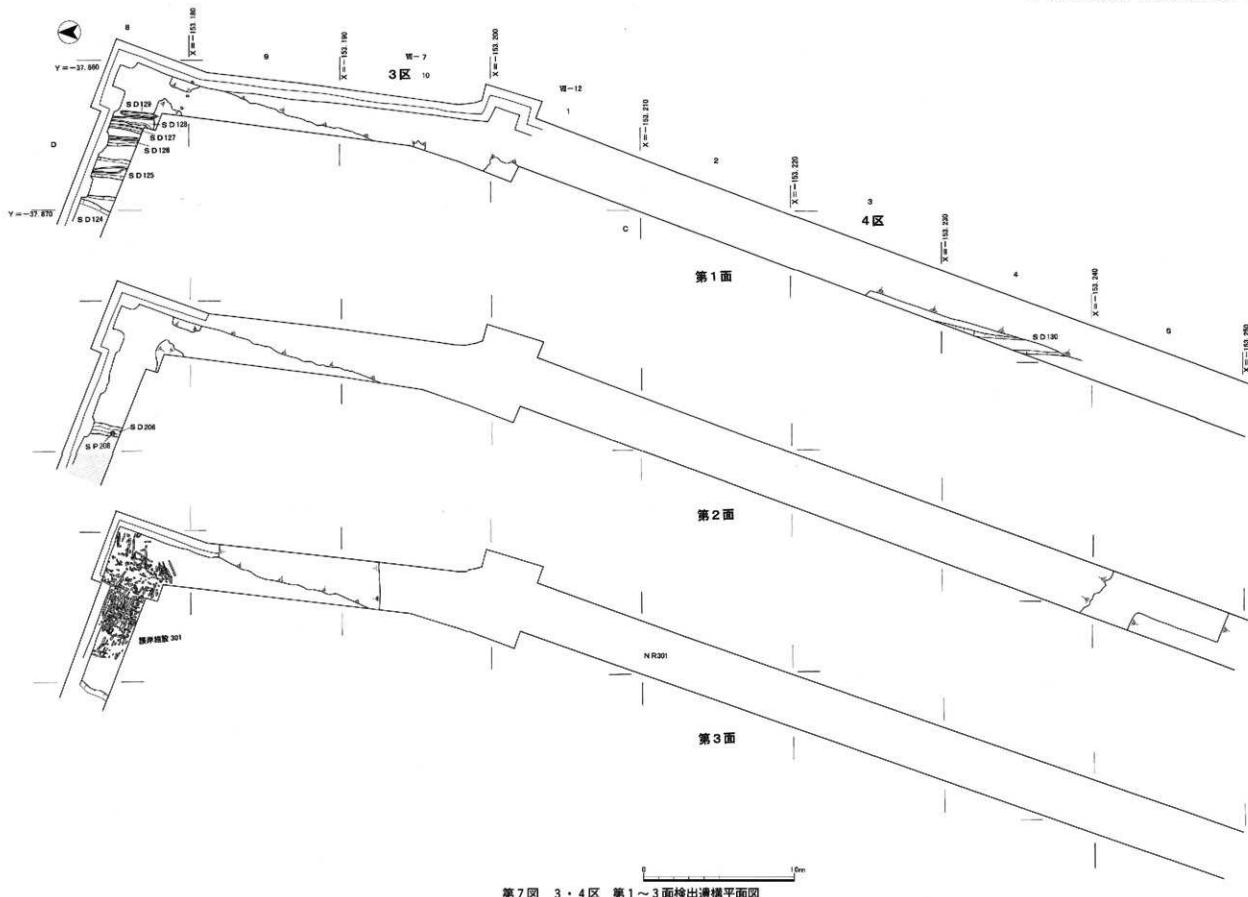
土坑 (S K)

S K101(第12・13図、図版二・二三)

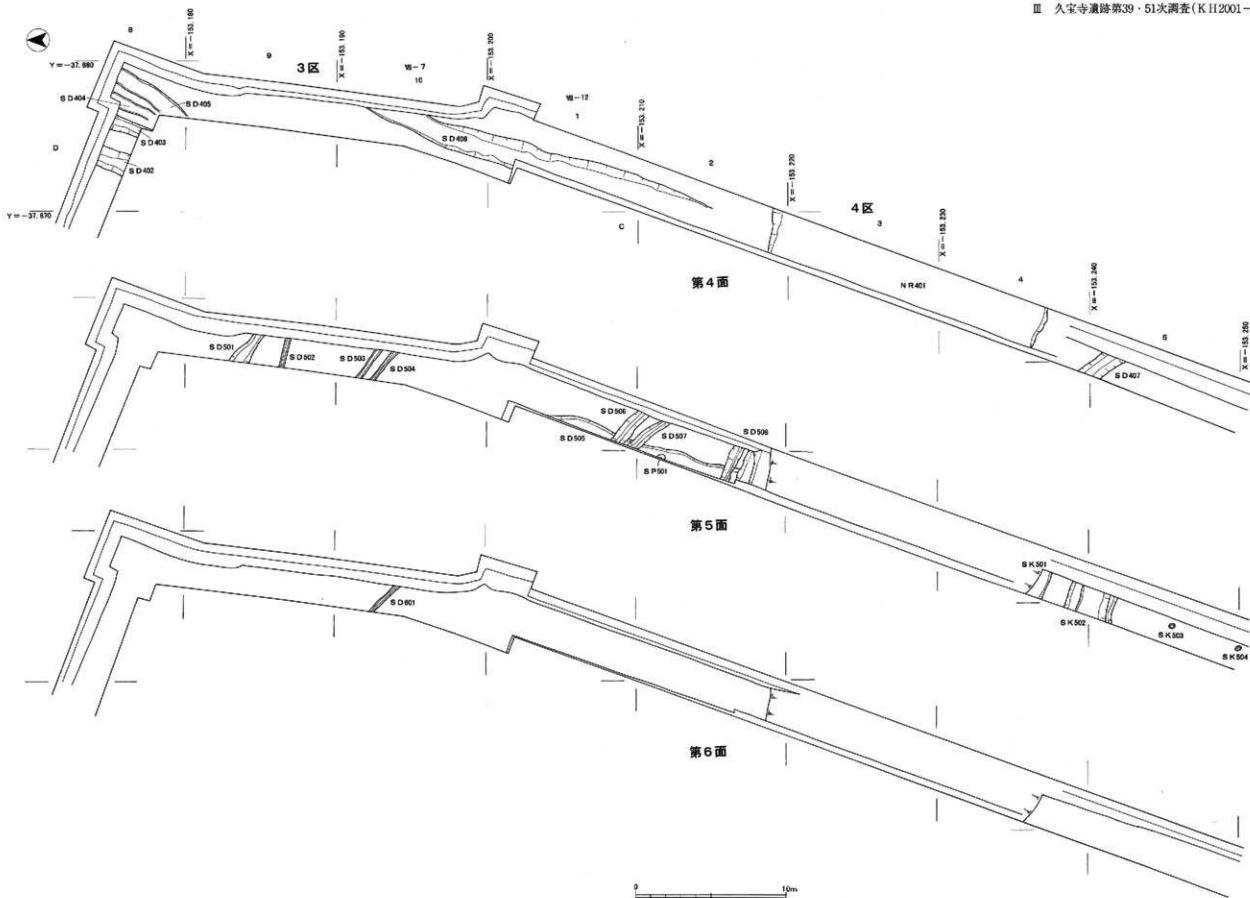
1区西部のⅦ-6-5G地区で検出した。北部は北側溝に切られるため詳細は不明であるが、平面形状は南北に長い梢円形と推測できる。検出部分で東西幅0.45m、南北幅0.3m、深さ0.3mを測る。断面形状は、ほぼ垂直な掘方を持ち、土坑中央で窪みがある。埋土は2層に分けられ、上層が5Y5/1灰色極細粒砂で、下層が非常に硬く締まる5Y3/1オリーブ黒色シルト混極細粒砂(2.5Y4/4オリーブ褐色極細粒砂のブロックを含む)である。遺物は平安時代中期の土師器が少量出土している。土師器小皿1点(1)、椀1点(2)を図化した。1は「て」の字状口縁の土師器皿で



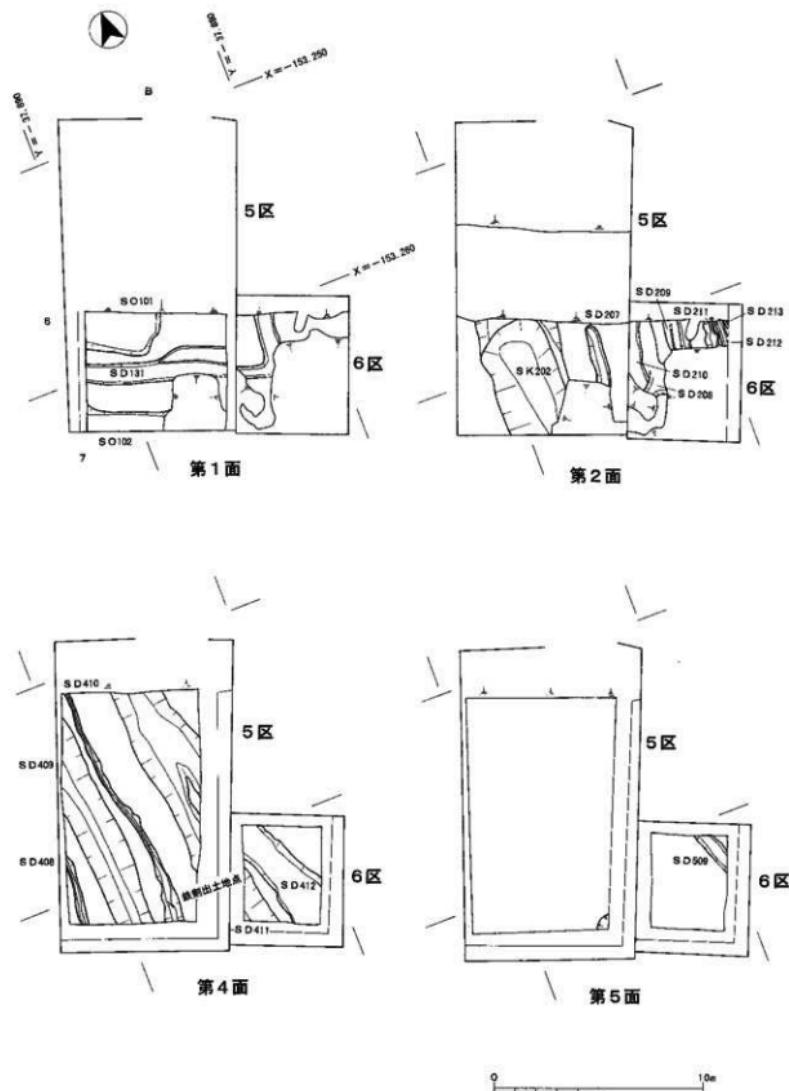
第6図 1・2・7区 第1~4・5・7面検出造構平面図



第7図 3・4区 第1~3面検出遺構平面図



第8図 3・4区、第4～6面検出遺構平面図



第9図 5・6区 第1・2・4・5面検出造構平面図(S=1/250)